
魔王はドM！？

レイン氷花

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

魔王はドM！？

【Zコード】

Z5241D

【作者名】

レイン冰花

【あらすじ】

高校一年の春に両親を亡くした不幸な少年五膳麗一は、ある日魔王と結婚することに！？そして彼の真の不幸？は始まる…！

不幸その一 始まりは彼女に会つた事。 (前書き)

自信作ですので読んでくださいな
レイン氷花

不幸その一 始まりは彼女に会った事。

新しい生活に胸をドキドキさせる春、そして誰だつて何かとウキウキする春に、マジでウザイ奴が現れた。しかも俺の目の前に。

~~~~~

早朝。

まだ誰も起きてはいない時間に俺は起しきれた。

「起きなさいー！麗ー！今何時だと思つてんのー。」

お袋が大声で怒鳴つている。

「はいよーー。」

俺は渋々起きるとする。お袋が起こした時点で二度も寝れない事は分かっていたからだ。

一階に降り、親父に挨拶する。

「おひ、親父！朝から早いな。」

という、俺にしては高いテンションで挨拶し、親父は読んでいた新聞を少し下にずらし、挨拶を返す。

「相変わらず遅いな、麗一。」

俺はテーブルの上の新聞を取り、我に帰った。

「どうした？ 麗一。」

親父が心配そうに顔を覗く。

「誰だお前は。」

「何を言つてんのだ麗一、私はお前の親父だろうが。」

親父と自称するソレは笑つた。

「五月蠅い黙れえ！！俺に親なんか居ねえ！！！俺の両親は2週間も前に交通事故で！！！俺の目の前でお袋と親父はぐちゃぐちゃに潰れて死んだんだよおおお！！！」

俺はテーブルにあつた灰皿をソレに投げ付けた。

ガンツ！

灰皿が壁に当たる音がし、灰皿が落ちる音だけがこの家に響いた。

「あ…？」

その音を聞いて俺は正気になつた。

「…また…か？くそつ…！」

お袋と親父が死んでから三日経った頃、この幻覚は現れた。何度も、俺を追い込む様に、俺を狂わせる様に。

そこまで考えて俺はやっと気が付いた。

「今何時だ？」

時計を見て、俺は凍り付く。

「やばい！早く学校にして、違うだろ？今日は春休みだろが。」

俺は完全に気が抜け、椅子にもたれ、天井を見る。

「…」こんな家に一日中居たくはねえな。

思わず俺は呟いていた。そして俺は椅子から立ち上がり、自分の部屋に行つて着替えて家を出た。

ここまで五分もかかつてね、なあ。

「ま、いつか。」

と、俺は割り切り、家を後にした。

しばらく歩くと、足音が背後から聞こえて來た。

ペタペタペタ。

裸足か？て事はホームレスか？

ペタペタペタペタ。

足音はまだまだ続いている。

俺の後ろを付いて来て何の用だ。一体。

ペタペタペタペタ。

…撒くか。

俺の足は通常よりも早くなっていく。

ペタッペタッペタ！

「コイツも歩を速めたか。ビッシュのまま速くしていくか？」

「ま、待ってください…！」

ん？話しかけてきた？しかも幼い少女の声か？俺は完全に足を止めた。そして、後ろにいた少女（多分）が止まり切らずに俺に激突した。

「あふえ…？」

うん、間違いない。コイツは女だ。しかも中一くらいの。何故そういう言い切れるつて？振り向いてまじまじと見たからに決まってんだろう？

「あ、急に止まらないでくださいこよーーー！」

鼻を押さえ、涙目で怒る。

かなり萌え、じゃない！何言つてるんだ僕は？とにかく、少女はかなり可愛かつた。

そんな事を、彼女の本性を知るまで思つてた。

「で、何の用だ？ストーカー。」

俺は未だに鼻を押さえている少女に言つた。

「ストーカーって酷い言い草！…」

「じゃあ、何なんだ？」

「愛の狩人。」

「よし、交番行こう！」

「まつ、待つて待つてお願い！お願いしますからあーーー！」

その少女はかなり必死に止めてきた。

まあ、俺もその必死な姿を見て可哀相に思い、思いとどまつた。

「あ、ありがとうございますー。」

少女は嬉しそうに飛び跳ねた。

「で、結局の所お前は何で俺の後を付いてきたんだ？」

俺の質問に、今まで飛び跳ねていた少女は突然跳ねるのを辞めて、真剣な顔を作り、顔を近付けた（背伸びしただけ）。

「それはですね。」

少女の気迫に押され、俺は唾を飲む。

「それはあなたが、魔王のお相手に選ばれたからなんです。」

その言葉に、田<sub>だ</sub>が点になる俺。

「あー、疑つてますね、その田<sub>だ</sub>は。」

ハイ、バリバリに疑つてます。

「では証拠を見せます。」

と言つて、少女はポケットから紅い指輪を取り出し、俺の指にハメた。

「いいですか？腰を抜かさないでね？」

そう言つて、少女は消えた。

「え？何だ？」<sub>こ</sub>まざ<sub>こ</sub>だ？どうして？

俺が混乱するのも当然だ。何故なら俺は、地下の暗い広場にいた。

「なんだ？どうして？こんな事に？」

俺は今まで公園にいたよな？なのになんだ！」はっまるで拷問部屋だな。

「遅かつたな。」

突然後ろから声が聞こえた。そしてその声は、明らかに女性の声だった。

「ふむ、近くで見てもかなり良いじゃないか。」

振り向いて、まじまじとその声の主を見た。

「あなたは……？」

そこにいたのは、紛れも無く美少女と呼ばれる様な少女がいた。少しつり上がった隻眼の紅い眼、小さいお鼻に柔らかそうな唇。そして光を反射する長い美しい銀髪。

胸にストライクした。

「ここちに來い。私の夫になる人間よ。」

俺は我に帰り、近付いていく。

「やうだ。そのままこちらに來い。」

俺は、彼女の言つ通りに近付いて行くが、一つ忘れていた事に気が付く。

「よし、その顔をもつと良く見させてくれ。」

俺は彼女の前まで来た。そして俺は彼女に顔を近付ける。

「結婚しよう。」

彼女はそう言い、唇を近付ける。

チヨットマテ。アイテハダレダトオモツテイル？マオウダゾ。魔王。

だが、そんな俺の思考はどうでも良くなっていた。ただ、彼女とキスが出来れば良いと、本気でそう想っていた。

「ここに誓う。私、ロメア・クロルタリアは、永久なる繋りを約束する。」

彼女は小声でそう呟くと、唇を重ねる。最初は触れるだけが、次第にエスカレートしていく、お互いの舌を絡み合わせ始めた。さらに麗一と彼女は互いに腕でお互いの体を抱き、離さない様にロックする。

「つ、はあつ…つ…。」

彼女は息継ぎの為に口を離した。彼女の目は、熱に浮かされたかの様に焦点が定まらず、頬は紅く、口元からは唾液がだらしなく垂れていった。

呼吸を整えて、彼女は言った。

「…あなたと私は、これで正式に婚約者という仲、です。」

「そう、だなつ。」

彼女は一ツコリ笑うと、とんでもない事実を語る。

「」れで正式に、あなたが次期魔王です。」

「はい？」

「だからあ、あなたは事実上魔王なんですよ?」

この戦いがまだ始まつてもいい事に。

「宜しくね ダーリン？」

「キャラ変わり過ぎだ——————」

麗一の不幸は始まつたが。

不幸その一 始まりは彼女に会った事。（後書き）

読んでくださったみなさまありがとうございました。

不幸その一 彼女はガラスのハート。（前書き）

面白いとか分かりませんが宜しくお願いします。

## 不幸その一 彼女はガラスのハート。

「で、どうこう事なのか詳しく述べて貰おつか?」

「だからあ、何度も言つてこるじゃないですか あなたは魔王と結婚することになつたんですよ?」

「だからさうじゃなくて、何で俺が魔王と結婚することになつたんだ?」

俺は桃色の髪をした少女に真相を聞いた。

「何故つて、魔王があなたに一目惚れしたからに決まってんじゃないですか」

「どうしてー?こんな取り柄も無い、どこにでもいそうな普通の人間の俺に惚れた訳?」

自分で言つて悲しくなりました。マジで。

「それはですね…。」

「この質問に少女は初めて答えに迷つた。

「え?とですね。これを聞いて魔王と結婚しないって事は出来ませんからね?」

何か聞かない方が良いよな?これ。

「魔王はいつもあなたの生活を覗いていました。」

「はあー?」

「…特にあなたの入浴の時を…。」

その言葉に俺は凍り付いた。

「え、いつから?」

「…二年前から。」

俺はテーブルを叩き、その少女をかなり怒氣を含んだ目で見る。

「まつ、魔王は恥ずかしがり屋なので。」

「どんだけ!?」

「とにかく落ち着いてください。話が進みませんから!…!」

俺は泣々座り直す。

「IJの話は置いといて、まずその紅い指輪を説明します。」

少女は、指輪を指差しながら説明を始めた。腕疲れねえ?

「その指輪は王室の鍵といいます。その指輪をはめると自動的に魔王の寝室に移動します。」

なるほど、だから景色が変わったのか。

「魔王の寝室には、普通は魔王以外誰も入れません。ですが、その指輪は、魔王の寝室に行ける唯一無二の鍵で、これはとても高価な物です。」

ふうん、あそこは寝室かあ、そういうや、良い匂いが充満してたな。

「変態。」

「スマセン。じゃなくてえ！－何で俺の考えてる事が分かつたあー！」

「口に出してました。」

あ、そうすか、失礼しました。

「とにかくその指輪は無くさない様にしてください。」

「う～す。」

「では次に私の血口紹介をします。」

そういう名前聞いて無かつたな。

「私はメア・クロルです。これから宜しくお願いします。」

メア・クロル？なんか魔王の名前に似ているな。てか待て、これから宜しくお願ひしますって？

「おこ、宜しくお願ひしまさつへいみうつ事へ。」

「何故って？私はこれからあなたと一緒に住むんですか？」

「は～。こちがいいから。」

「住むといふがいいから。」

「向でお前を住まわせんといかん。」

「何故って、私は魔王ですから。」

「は～？」

「正確に云ひて、この世界の魔王の体です。」

「じゆ事？」

「細け一事気にすんな。」

「いやこちが気になるだろが、それ。」

「後から分かれ、そして早く寝かせろ。」

「え～？ 向こいつ、性格変わったしつが。  
「あの～、メアさん？ 性格変わつてますよ？」

「気にするな、こちが地だ。」

え～！？何がショック…！

「部屋はお前と一緒にで良い。」

「いや、空いてる部屋があるから使つて良いだ。」

「別にお前と一緒に良こと言つてあるのだ。」

何か魔王より偉そうだな。

「いや、遠慮しなくても良ければ、好きに使つて良いって。」

「だから私は、うぐう、ぐすり、ひく。」

何故突然泣く！？

「わ、私は、ひぐ、ぐすり、お前と同じ部屋で、ずず、良いつて、うぐう。」

「分かった分かった、何か知らんけど一緒に部屋で良いんだなー！？」

メアは泣きながら頭を上下に振る。

扱いにくいなコイツ。

時計を見てみると、… 10時だった。

飯食つてないけどあんま腹減つてないからいいか。

「お前は腹減ったか？」

「ずっと、減つてない…。」

よし、風呂入って寝るか。

「風呂沸かすから先に入れ。」

一応今日から一緒に住むからな。

「え、私はお前と一緒に入りたい。」

「えー!？」

「うぐう…」

「分かった、分かったから一緒にに入るよー!」

「マイッ口悪いくせに脆いよ、ガラスのハートだよ。割れ物注意だよ。

「ありがと…。」

俺はお湯を沸かし、指輪をポケットから取り出して指にはめた。

「ダーアーリン」

「ぐほつ!？」

寝室に着いた瞬間背中から抱き付かれた。

「そろそろ来る頃だと思つてたんだあ

「ぐつ、良いから放せー。」

「嫌だあ

「そりやつー

「えー?」

背中に張り付いていた魔王を背負い投げした。

「ぐふつ

モロに背中から落ちて床につくまつたよ魔王。しかも声が嬉しそうだったのは無視しよう。

「で、聞きたい事があるんだが?」

「任せー!アの事についてでしょ?」

「察しがいいな。」

てかもう回復したのか?

「メアはね、口は悪いけど淋しがり屋で怖がりで無邪氣で甘えん坊でガラスのハートなんだよ?」

「…………面倒くさ。」

「そんな事言わないで、ね？」

「ハイハイ分かりましたよ。」

「またく、面倒くさいやつが来たな。」

「後頼みみたい事があるんだけど。」

「何？」

魔王が上目遣いに囁つ。

「毎日一回元来てね？」

「分かつた。」

「約束ね？」

「ハイハイ分かりましたよ。」

「ハイは一回」

「はいよー！」

約束を交わすと、俺は家に戻った。

…約束、か。



**不幸その一 彼女はガラスのハート。（後書き）**

読んでください。たみなさまありがとうございます！

### 不幸その三 彼女は男を知りません。 (前書き)

今回は少ししか不幸要素がないです。代わりにちょっとだけいちに偏り過ぎました。

## 不幸その三 彼女は男を知りません。

五膳麗一宅

10時32分。

「お風呂 お風呂」

と連呼しながら、メアは飛び跳ねている。

元気過ぎ。しかも一緒に風呂入らうとかゆうし、本当疲れる。

「お湯沸いたぞ。」

「わい！」

卷之三

「廊下を走るな。」

「はい」

たし、どうあるかな…。

「麗一？」

メアが心配そうに見上げている。

「じゃ、じゃあ早く服脱げ！俺は着替え持つて来るから。」

そう言って、その場を脱出した。

服を取つて戻つてみると、メアはまだ服を脱いでなくて、そのまま  
まやこに立つていた。

「風呂入らないのか？」

当然そう聞くよな、誰だつて。

するとメアは俯き、何かを呟いたが、小さ過ぎて聞こえない。

「何だつて？」

「…服の脱ぎ方が分からない。」

はい？

「服の脱ぎ方が分からないから入れないの！」

えーと、この子馬鹿だろ。

「だから。」

？

「脱がして」

笑顔で何危ない言葉吐いてるんだコイツ。それに今の発言は殆どの男達が獣になりかねないような攻撃だぞ。

「お願い。お願い。おね、ううぐつ、ひつく

「分かつた分かつた分かつた！だから泣くなよー！」いつの苦手なんだからー。」

泣かれたらこいつらの負けは決定だな。

「で？本当に俺が脱がしても良いんだな。」

そして本当にこいつは脱ぎ方が分かんないのか？一応あいつに聞け。

俺はまたポケットから指輪を取り出し、指にはめる。

「あらら～？また何か用なの？」

魔王はベッドに寝そべって雑誌読んで菓子食つてた。

「メアは相変わらず何かしたのかな？かな？」

「お前は相変わらず魔王のイメージを根本からぶつ壊してるな。後ひ〇〇〇〇〇〇頃にキャラの口調真似んな。」

「別に良こじやないケチー。」

「ケチじゃない。」この世界の安否に関わるんだぞ？」

「そんなの関係ねえ！ そんなの関係ねえ！」

「五月蠅い黙れ。」

「はいすいません。」

魔王が大人しくなつた所で本題に入るか。

「メアつて服の脱ぎ方分かんないのか？」

「うん、分かんない。」

「分かつてゐるんだつたら教えるよ。」

「いや、それがね？ 教えたんだけどね。」

「一応教えはしたのか。」

「うん、でも全然覚えてくれなくてね。」

「そこまで馬鹿なのか？」

「ぶっちゃけるとね、もつと馬鹿。」

「…」

「…」

「…

「…

「…

「…

「…

「…とにかく、俺が脱がしても良いんだな？」

「そゆ事。」

「…じやあ、俺戻るよ。」

「…うん、がっばってきてくれ。」

そして、家に戻った。

「遅いーーー！」

そう叫ぶと、メアは抱き付いて来た。

「ああ、分かった。うん、脱がすから脱衣所行こうな。」

そして俺は脱衣所につき、メアの服を脱がせようと/or>。

「早く　早く　」

メアは、やっと風呂に入れるのがかなり嬉しきらしく、はしゃい

でいる。

「ジッとしてる。」

俺はとこうと、かなり動搖しています。

何故つて？分かれ。

仮にもまだ思春期の俺にとつて、女の子の服を脱がすという行為は、よからぬ妄想を作り出し、せりに心拍数が増え、鼻息が荒くなり、今にも襲いつになつてしまつ。

「お風呂 お風呂」

メアは俺の様子に気付いてはいない。

よし、脱がしにかかるぞ！！

思つんだが、この格好つて…、なんとなく制服に似てないか？

長袖のシャツに、黒い膝まであるスカート。その上にマントとうか、ローブみたいな物を羽織つている。

…取り敢えず俺はローブみたのを取る。

まんま制服じやん。

と呟く程、その服は制服に似ていた。

よ、よし次はシャ、シャツだな！

シャツのボタンを取れる様に、メアを回転させる。

そして上から順にボタンを取つて行き、シャツの両襟を反対に開いた。

「つー？」

声になりました。

シャツを開くと見えたのは、予想よりも大きい桃がありました。

「下着着けて無いのか！？」

「だつて苦しいもん。」

無邪気に答えるメアは、ウキウキしてました。

「…。」

氣を取り直して、スカートを脱がす。

力チャカチャ、ジーー。

一瞬覚悟した。なんせまたつけている物が無いかも知れないのだから。だが、予想は外れて、薄い水色のちょっと透けているパンツがあつた。

そして、次はパンツを脱が、て待てや。いくらなんでもパンツは脱げるだろ？

「早く　早く　」

「おい、パンツは自分で脱げ。」

「これ以上は息子共々耐えられませんから。」

「え？パンツも脱がしてよ！」

「いや、それは自分で脱げ！」

「脱げないもん！」

「嘘吐け！」

「ふえ、ひぐ、うう」

「分かつた分かりましたやらせて下さい！」

俺はまたポケットから指輪を取り出し、指にはめる。

「おっは～　今日三回目だね？」

「おい！メアはパンツも脱げないのか！？」

「うんそうだよ？パンツだけじゃなくて靴下も脱げないよ～？」

「それ大丈夫か？」

「軽くやばい」

「むひゅくひゅやべーだろが！……」

俺は持っていたフォーアク（何故持っている？）を、魔王に向かって投げた。

サクサクサクッ！

放たれた三本のフォーアクは、魔王のアホ毛を仕留めた。

「うわ～！私のチャームポイントが～！～！」

魔王の悲鳴を無視し、家に戻った。

「よし、やめやー。」

俺はメアのパンティに指をかけた。

「早くう。」

そして俺は、パンティを一気に降ろし、この世の天国を見たよ。  
そして、この世にもう未練は無いよ。いつでもあの世に行ける

まあ、これで終われないけどね。

メアを風呂に入れ、俺も服を脱ぎ始める。

「早くう

せつせと正反対のテンションだな。

そう思いながらも、服を脱ぎ終えて浴室に入る、そしてそのまま馬鹿がいた。

「…何やってるんだ? メア。」

メアは、ふろおけで溺れました。

「たっ、助けて! あぶつ、た助け、て!」

俺は風呂で溺れてる奴を初めて見た。

「やれやれ。」

俺は仕方無く、メアを両手で抱え上げて助けた。

「あ、ありがとうございます。危うく風呂で溺れる所でした。」

何故溺れる? 俺の一生の疑問になるな、コレ。

「てゆうか初めは体洗ってからふろおけに入るんだぞ?」

「だつて体洗えないんだもん。」

…またこれが。

「…よし、頭貸せ。洗つてやるか。」

そして俺はメアの体まで洗う事になつた。

「ふむふむ、いつて背中は洗うのか。」

熱心に見えようとしてるナゾで、じつは覚えないんだ…。

「よじつーひーごわ終戦…、な後は、…前か…。」

「じつしたの？次は前だよ。」

メアはイスの上を一回転して、俺と向かって会つた。

「早へじりあ

はあ、できるだけ見ない様にするか。

「へべりたこべりあ

俺、イマムネワリツテマス。

「む、少し痛こよみ？」

「スマナイ。」

「何故に言ー？」

「ツギハシタノホウアライマス。」

「また！？しかも無視！？」

ソンナコソナデ、『ほん…えー、そんなこんなでメアを洗い終え、自分を洗おうとしたところ、メアが自分が洗うなんて言つてきやがつたが当然無視して普通に終わらした。そしてやつとふろおけで休めると思つた所、家のふろおけは意外と狭く、一人しか入れなかつたため、風呂を出ようとしたらメアが溺れてど、そんなこんなで今

の状態になりました。

「うーん、気持ち良い」

「だなあ。」

「うつじやつー」

「ぶつーー？」

「あやはははははーー！」

「てめえ、水かけるなー！」

「あやははははーー！」

「うぬせーーそして暴れるなーふろおけは狭いんだから静かにしろーー！」

「はーい」

歯を噛む気付かでしょつか？俺とメアせの狭いふりおけに密着して入っています。

「わーい！」

バシャバシャ！

「狭いんだから静かにしれえ！..」

ちなみに、どんな姿勢かと言つて、俺は普通にあぐらを搔いて座つていい。そして、メアは俺の上に向かい合つて跨がっています。ですから、メアの女の子の部分がかなり密着してます。そして、メアが動いてしまつと俺の息子の血口出張を見てしまつ訳でして。

「ハグハグッ！」

「おいー！どこを噛んでやがるー..」

「え？乳首だけど？」

「何故噛むー？」

「だつて麗一に元氣出してもらいたかったから。」

「いやいやー？だからって何故乳首噛むー？」

「魔王は元氣になつたよー」

「いや、元氣になつたけどちよつと違うだろー？」

俺の息子が、ね。

「もう、どうちなの！？『元気になつた…、？』

メアは、後ろを振り向く。そこには、我が恩息が戦闘準備に入っているのが見えた。

「…………。」

俺絶句。

それに対し、メアの反応は意外な物だつた。

「何コレ？」の硬い棒？」

「え？それを知らないのか？

「何だろコレ。さつきは萎んでたのに変なの

メアは、不思議そうに指でつづ突き、今度は握つた。

「はうーー？」

「え？」

メアは、不思議そうに俺を見つめる。

「な、なんだ？」

俺は精一杯平静を装つ。我ながら苦しこと感ひ。

「…。」

おもむろに、メアはまた俺の愚息を強く握つた。

「うひ…。」

メアは俺の反応を確かめてる。で、俺は顔を逸らしてゐる。

ニタア

「せこやあーー。」

メアは愚息を掴んだまま、先端を擦つた。

「うぐうー?」

それに俺は耐えられず、声を上げてしまつていて。

「なあーんだ。麗一はこうすると元気になるんだね

「おーー!元気になるの意味が違つだらうがーー。」

俺が叫んだ瞬間に、メアはまた俺の先端を擦つた。しかもぞりつきより強く。

「うあひーー。」

「よーしー!元気になつたね麗一。」の調子でもつと元気にならうね

麗一

「お、おこ……。」

「やめりやー。」

「うわあーーーー。」

そんなふうに、メアの無知が分かつた俺でした。

俺はあの後、風呂を出るまで耐え抜きました。まさに死闘とも言える戦いを。そして風呂から上がり、メアと自分の体を拭いて歯を磨き、メアに俺のお古を着せて、一緒に寝た。

消えかけの意識の中、一つ分かつた事があります。

それは、メアにはちゃんといろんな事を教えない（特に男について）、この恐ろしい悲劇が生まれるって事が分かりました。

多分これは俺の心に永久に残るだろうな。と、遊ばれた息子を労りながら、五膳麗一は眠りについたとさ。

めでたし。めでたし。

## おまけ

麗一はトラウマが一つ増えた。

麗一は大人の階段を三段くらい上がった。

麗一はこの世の真理を見た。（メアの体）

麗一の息子は元気になった。

タラツタツタツターン！

麗一はレベル2になつた。

不幸レベルが50上がつた。

魔王の愛が強くなつた。

メアの扱いが少し分かつた。

麗一の心が良くなつた。

幻覚が弱くなつた。

作者に不満が積もつた。

作者に対して殺意が湧いた。

神（作者）の罰が下つた。

次回の出番が減った。

悲しみが込み上げた。

またね

## 不幸その三 彼女は男を知りません。 (後書き)

今回はどうでしたか? 良ければ評価をしてくださいまし。では皆さん、また次回へ

麗ー「こんな小説に次回なんてあるのかよ?」

レイン「天罰。」

麗ー「ぎやあー!」

氷花「僕も」

「オオオオオ!!

「熱っちいいい!!」

レイン「…やつ過ぎだよ。炭だよ。備長炭だよ。」

氷花「てへ 間違えちゃった」

レイン「…。」

メア「麗ー!…どうしたの!…誰に殺られたの!…え!…作者!…!…」

氷花「この人が殺ったよ。」

レイン「ええ！？」

メア「麗」の敵にい——覚悟おお——。」

バコドカメキピシパリンチュドーン！－！－！

レイン「地獄の魔神様か……」

冰花「：（默祷）」

作者との語らい

おわり

またね

不幸その四 彼女の寝顔は破壊力抜群です。（前書き）

えーと、一応頑張りました。はい。

不幸その四 彼女の寝顔は破壊力抜群です。

五膳麗一 [サトウ]

朝の七里。

「田嶽まじロシップー。」

「ぐえー!?.」

「ハツハツハー! やつと起きたか寝坊助太郎! ! !」

「ゴホツゴホツなんだそのマ○オにある様な技は、しかも寝坊助太郎って無理矢理漢字当てただけだろうが。」

「違つもん! ただくつつけただけじゃないもん! だつて、だつてひつぐうぐつ、ぐすつ」

「分かつた分かつた俺が悪かつたから泣くな、朝から鬱陶しい!」

「ふえ…」

「じめんじめん朝から言い過ぎた。」

抱き締め + 頭を撫でて泣きやむまで待つ。

「すすり」

大分落ち着いて来たな。

「よしよし良い娘だ。」

頭を優しく撫でて、子守歌のよつひ言つた。

「…すい…すい…」

あれれ?

「メア?…寝てやがる…。」

メアの顔を覗き込むと、可愛い寝顔があった。

「つうか、子供か?お前は。」

半ば呆れつつも、そっとお姫様抱っこしてベッドに寝かせる。

この寝顔は見ていてかなり可愛い。

「童顔、小柄、そこにある胸。」

萌え要素をかなり持つてるな。

「しかもこいつの寝顔は全てを癒すみたいだな。」

現に俺は癒されてる。

「…すう…すう…」

さて、朝食を作つて来るか。

「もつと見ていたいけどな。」

俺はドアを静かに閉め、一階に降りる。

…え、次のニュースです。世界中で原因不明の突然死が流行っています」と、その一

ピシ

テーブルの上にあるリモコンを取つて電源を消した。

最近物騒だな。聞いてて木林になるよ。

リモコンを置き、エプロンを手に取る。

「そう言えば、魔王はいつもどんな物を食つてんのかな。」

ホケットから脚輪を取り出しつつ、脚にはおる。

۱۹۰۷۸۰۱

着地成功、つて誰か突っ込めよ。

(なんでやねん。)

テメエに頼んでねえよ。

(酷いー)

ウザいから黙れ。

「さて、と。魔王はどうだ？」

いつもなら声かけて来るの。

「う……う……」

寝息? しかも後ろから。

「寝てたのか。」

振り向くと、眠り姫がいた。

「……綺麗だ。」

な!?

そう呟いた口が、自分で信じられなかつた。

「すう……すう……すう……」

そんな葛藤など関係無しに、眠り姫は寝息をたててゐる。

「てゆうか、まだ起きてなかつたのか。邪魔したな。」

俺は指輪を取ろうとして、思いとどまつた。

「……すう……すう……」

眠り姫はまだ寝息をたてている。

「だ、大丈夫だよな？」

何が！？でか俺は何考えてるんだ！？寝てる間にキスしようつてどうして思った！？

「……すう……すう……」

俺が気付いた時には、自然と足が眠り姫に向かっていた。

「ま、まあ大丈夫だよな？」

（誰に言つてんだ？）

読者にだよ、ボケ作者。

（酷えーーー！）

さて、邪魔者がいなくなつた所で始めるか。

眠り姫は薄い物を羽織つてゐるだけで、中が透けて見える。

俺は息を殺し、眠り姫の顔を覗く。

「……すう……」

相変わらず眠っている眠り姫の頭を撫でてみた。

「……うん……」

「！」

俺はすかさず指輪に手をかける。

「……う…………すう…………」

起きてないな。よし！

眠り姫の唇に自分の唇を重ねる。

それだけの行為に、心臓はかなり早く脈打ち始める。

お、落ち着け俺。まだ眠っているから大丈夫だ。

そう自分に言い聞かせて、逆に心臓は速くなつていく。

「……ううん？」

「んあ。」

眠り姫は、かなり最悪のタイミングで起きてしまった。

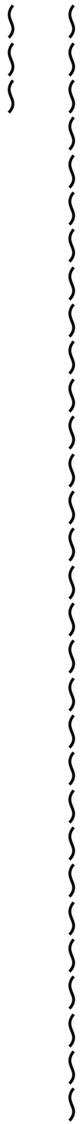
やば。俺ヤバいよな？この状況。

魔王は一時停止している。勿論俺も。

そういういつまでもキスしたままじゃ話出来ないよな。

唇を放そうとしたら、魔王の腕に止められた。そしてそのまま引き戻されて、キスを再開した。それもただのキスではなく、舌まで使ったディープキスだ。

予想外の展開に驚きつつも、こいつらも舌を使って、相手の舌の動きに答える始める。



ディープキスを始めて十分くらい経った頃、さすがにむづ限界の様で、魔王は口を離す。

「はあっ、はあはあ……」

魔王は息を整えようと、大きく深呼吸を何回かした後、俺を見た。

その視線は、何かを咎めているような物ではなく、逆に愛しくて仕方が無いといった視線だ。

「言つてくれれば、いつでも喜んでしてあげるのよ。」

やつと口を開いたと思ったらそれが、てか寝ている間にキスしたのは責めないのね。

「気持ち良くて寝てたんで起こすのが勿体なくてな。」

うそ八百だな俺。

「そうですか。では、寝てる間にキスしたからもう一度してください  
いまし」

もう言いつと、また唇を重ね始めた。

ていうか、いつの間にやら俺が下になつてゐるな。…逃げられん。  
まー逃げる意味ないんだけどね

その後、俺は魔王とのキスを堪能してきた。

で、戻つて来ると、いつの間にか起きていたメアに文句を言われ  
た。

「ボケツとしてねえでさつさと作れや。」

お、何か久しづりに見たな。こいつの地。

「大体、朝食も作らないで何してたんだよ。」

「すみませんね~。」

「しかも出番少ないし。」

「それは作者に言え。」

「私何もしてないのに、ひつぐ」

「あーー！今度作者に言つからり、なーー？」

「うう、ありがと。」

メアの頭を撫でてあやす。

「さて、朝食を作るぞー。」

「おーー。」

ひつして、俺は朝食を作り始めた。

おまけ

麗一は魔王に興味を持つた。

メアの将来が不安になった。

魔王の寝顔を見た。

タラッタターン！

麗一はレベル3になつた。

麗一の不幸レベルが50上がった。

メアの扱いがまた少し分かつた。

魔王の愛が強くなつた。

作者は馬鹿だと思つた。

作者は変態だと思つた。

作者に対して不満が積もつた。

神（作者）の罰が下つた。

次回の不幸が凄まじくなつた。

いじけた。

またね

不幸その四 彼女の寝顔は破壊力抜群です。（後書き）

今回のはじりでしたか？

不満などがあれば、遠慮無く言つてくださいな。

麗ー「おー、馬鹿作者。」

レイン「何だね？変態。」

麗ー「今回はメアの出番が少ないが？」

レイン「気にするな、運命だ。」

麗ー「何が運命だ。ただお前の力不足なだけだらうが。」

レイン「うぬせえー。」

麗ー「まあ、こんな馬鹿作者ですけど。これからも宜しくお願ひします。」

作者との語り

終わり

またね

**不幸その五 彼女は幼児退行しました。（前書き）**

今回も少ないです、宜しくです。

## 不幸その五 彼女は幼児退行しました。

夕飯の買い出しに行く途中の道で、俺は厄介な物に出会ってしまった。

「アンタ誰?」

普通、初対面の人にはそう聞くよな?

「申し遅れました。私、ヘルガ・ドルスターです。」

「あー、ヘルガさんですね。何か俺に『』用で?」

「ええ、私は雇われた殺し屋で、貴方を殺しにきました。」  
はいい?

「人違いじゃありませんか?」

人違いだろ。

「いいえ、違いますよ? 貴方であつてるはずです。」

おいおい、マジか?

「どうして俺は殺されんといかん?」

てゆうか、俺何か悪い事した？してねえよな？……多分。

「貴方は魔王に選ばれたからですよ。貴方も既に分かっているから、魔王との結婚を決めたんでしょう？」

「え？」

どぬ事よソレ？始めて聞いたぞ。

「あらり？聞いていなかつたんですか？それはなんとも可哀相ですねえ。」

黒装束の男はなんか可哀相な物を見るような視線した。

「まあ、だからと言つて殺さない訳にはいかないので。」

と言つて、黒装束の男はなんか変な形の刀を取り出し、構える。

「御愁傷様。」

そして、男は刀を振り下ろした。

この時の俺は、全然別の事を考えていて、向かってくる刀は視野に無かつた。

ブシユツ

辺りに撥ねる鮮血。

周りにいる通行人の驚愕の顔。

血がべつとり付いた刀。

ニュースの司会者。

男の恐怖に引きつった顔。

「なつ、えあ、…れ？」

「何啖いてるんだお前？」

頼むからそんな顔しないでくれ。笑えてくるだろ。

「おーい、生きてますか～？」

反応無し。

「おーい。」

男は少し後ずさる。

「なんだ。意識あんのかよ。」

「…あなたは、人間か？」

「人間だよ正真正銘の。」

いきなり失礼な事ぬかすなよ。

「つーか、これで終わり？」

バキン

掴んでいる刀を折った。

「あーあ、刃の部分握ったから血が出てるじゃん。」

血が流れる右手を男に見せる。

「くっ、一時撤退ですね！」

男は俺に背を向けると、…逃げた。

「一時撤退つて、またくんのかよ。」

それは避けたいな、こんな痛い思いしたくないし。

俺は男の後を追い始める。

「ちつー！」

男の妙に高い声が響く。

「待て待て～」

なんか俺この状況楽しんでない？

「我が魂を裂きて、この地に恐怖を刻め！」

なんか聞こえる?。

「カマイタチ！！」

なんか、強い風が吹いたと思つたら周りの物がバラバラにされて  
いった。

「アラ不思議」

てゆうか俺ピンチ？

男は勝ち誇った様に笑つてやがつた。…足震えてるけど。

「よつヒ。」

何かを避けてる俺。

「ふえ？」

なんか呆然としてるな。おつ、危ない危ない。

「ほつ。」

男は俺をまじまじと見ていく。

「おつヒー。」

男は声が出ない。

「ほい。」

男は口をポカンと開けている。

「よつ」

男は絶句した。

「ほいほい」

イナバ〇ア一

男はなんか地面にのの字を書き始めた。

「下手な字だなお前。」

「つわあー!?」

後ろに口ケる男。

「痛いい…」

おーい、パンティ見えてるぞー? 痛がるのは隠してからにしむー!

「はえー!?」

慌てて隠す男…え?

「で、ちょっと待てやあーお前まさか、女の子ー!?」

頬を赤く染め、うなずく殺し魔。

「…」

「…女だよな？」

「…はー。」

「…殺し屋？」

「…はー。」

「…怖がり？」

「……せー。」

「殺し屋向いて無くね？」

「…はー。」

「つなぎこちやつたよこの娘。

「俺を殺すのは諦めろよ？..」

次何人で来るか分かんねえし。

「いいえー諦めませんよーー！」

むー、頑固な奴だな。この手は使いたくなかったんだが、こっち  
は命かかるから仕方無いな。

「おまじないかね。」

ボソボソ、ボソボソ…

「え…？あ、ふえー？」

アラ不思議 眠に程に血かいた肌がトマトみたいに赤くなつて混乱し始めましたよ

「これでも諦めない？」

「よろこな。

「あえへ。まああー。」

あ、血擦ぬせなくなつてね…。

「…エーハー。」

「ひしゃーらしゃー」

「…ぬ、本通りエスカヒコヌおつかなーー？」

「あしゃーへへー」

…「ふ、俺がひそなーしたんだよな。

「せいやーしゃーー。」

確か、ヘルガ・ドルスターって言つ名だつたよな。

「ふーん せんじ

— 1 —

—

五膳麗一宅。

6時34分。

「えへ、という事で、今日からここに世話をすることになった。元殺し屋のヘルガ・ドルスターちやんです。」

「ふにゃん！」

۲۰

何か反応示してよメアちゃん！

「か」

一  
か?  
「

「可愛いいい！！！！！」

「アリス？」

メアはヘルガさんにダッシュで抱き付いてきた。

「ふーちゃんー？」

「ふーちゃんー？」

「ひーちゃん？？」

「くーちゃんー」

「ふーー。」

…何か会話成立している。

「くーちゃん？」

「ふーちゃん。せーひー。」

「ふーちゃん。せーひー。」

…凄いな、メア。

「「「ふーちゃん。ふーちゃん。ふーちゃん。」」」

会話成立じゃなか、歌歌い始めたな。

「「「ふーちゃん。」」」

うつして、居候がまた一人増えた。

…面倒くせ。

おまけ

「ちよっとー私の出番がなーじやないー！」

「気にしない気にしない。」

「もーーー私一応ヒロインなのニーーーー！」

…魔王は叫んでいた。

またね？

## 不幸その五 彼女は幼児退行しました。（後書き）

感想や氷花をお読みしておられます。

麗 | 「送る奴なんていないだろ。」

レイン | 「さあー。」

麗 | 「はあ、こんな作者の元に生まれたくないかった。」

レイン | 「お前のお腹無くしてやるーーー。」

麗 | 「おひ、やつひみやがれへボ作者。」

レイン | 「スマセん出来ません。はい。」

麗 | 「…こんな作者だが見てやつてください。」

お終い

**不幸その六 彼女は謎が多 ciòです。（前書き）**

今回の話はあまり面白くないです。間違いなく。

## 不幸その六 彼女は謎が多いです。

えへ、前回ヘルガさんを幼児退行させてしましました麗一です。

「ふにゃにゃ！」

「ひにゃーー！」

今心底後悔します。

「「ふにゃにゃ～」」

何故つて？御答えしましょつ。

「ちつたあ静かにしうお前ひー。」

「「ひにゃーい」」

元気に返事をする二人。

拾つて来てからずつとこの調子だ。仲が良いのは良いんだが、四六時中このテンションはかなりキツい。

「あなたは私の奴隸 あなたは私の奴隸 だからあなたは私の  
バシイインー！」

「なに危ない催眠してんだ。ヘル」ひち来い。」

「ふにゃあーい?」

ヘルガが目を回しながら歩いて来る。

「酷いよ麗ー!…女性を殴つちゃいけないんだよー?」

額を撫でながらメアは突っ込んで来た。

「ロ○○テ○○モー!」

それを俺は横に受け流す

「ふわせー!」

メアはそのまま最高速度でテレビの画面にぶつかる。

「よしよし、ヘルはもつ寝とけ。」

ヘルの頭を撫でて、眠るように促す。

「ふにゃー。」

「よしよし良い娘だ。」

俺はヘルを部屋に送り、ソファに戻った。

「ねえねえ。」

「なんだ?メア。」

てか復活早え。

「ヘルツていう、眞界の女王みたいな名前よく思い付いたね。」

「それは何か?遠回しに俺のセンスを疑つてんのか?」

「バリバリに。」

「おい、そこは否定するといひじゃないのか?」

「別にどうでも良いだろが。」

「おい、そこで地出して逃げるな。」

「逃げてるんじゃねえよ。ただこんな無駄な話題で時間使いたくな  
いんだよ。」

「おい、ちょっと来い?」

「いえ、遠慮しておきます。はい。」

「大丈夫だから来い。ただ一、一発殴るだけだから。」

「ビijo!?どの辺が大丈夫なの!?」

「気にシナーライ。」

「パクンな!」

「そんなの関係ねえ！ そんなの関係ねえ！」

「あれ？麗一、大丈夫？」

明田の天氣は○レ晴○カ○

—あの、麗一さん？

我が生涯一戸の悔し無し！」

か  
く  
二

卷之三

商は力能<sup>ハナ</sup>にはあり

卷之三

二

あれ、麗ちゃんが遅事して

返事が無い。  
ただの屍のようだ。

【メア視点】

「どうする!?」こんな時は誰か…。

そうだ！魔王だ！

「心にい。」

「え！？」

声がした方を向くと、ヘルちゃんがいた。

ここからは吹替えでお送りします。

「どうしたの？」

「おじいさん」

「え！？」

私脱がし方分らないよお！どうしたら良いの！？

「おしつこ漏れちやう！」

「ちよつと待つてね！お願い！」

せばい！

「一 起居の體」

ドカボコメキピシ。

返事が無い。ただの変死体の様だ。

「うひなつた、」

ポケットから蒼い指輪を取り出し、自分の指にはめた。

~~~~~

【?視点】

ん？メアに変わったの？
メアの奴交替するならすると言えば良いのここ。
いつもこきなり変わるんだから全くもう…。
「で、私は何すれば良いのかな？」

「ふにゃあ～！」

背後から、可愛い声がした。

「あら？あなたは確か…」

「ふにゃん！」

わっ！突然抱き付いて来た…どうやらやったのこの娘。

「ふにゃああ…」

え、何この温かい液体？みたいな感じ……。

「ひにゃ～。」

かなり気持つよとそつな顔してる……へ、まさか……。

勇氣を振り絞り、下を見る。

「……やっぱ？」

や二には見事にお漏りのこわれてました

「え～と、私はこれを始末しなきゃいけないのね？」

辺りを見回すと、完全に伸びてゐる麗一がいた。

「麗一、起きる～、この状態を何とかして～。」

助けは空しくコジングに響く。

…やるしかない訳ね。

「はあ……」

…よしー頑張りますか！

さうと決まれば、この娘の服を着替えせなきゃいけないわね。

「ふにゃあ。」

「よしよし、待つてね? 今着替えさせてあげるからね。」(共通語)

「

まずはこの娘のパジャマのズボンとパンツを脱がして、タオルで拭く。

「よしよし…。」

そして次は着替えを持って来るとして、どこにあるんだろうか?

「着替え」にあるか分かる?。(共通語)

「ふにゃ…」

…分かるみたいね。

「ふにゃひにゃ…」

指差されてるのは、二階か。

すぐ二階に上がり、服を取つて来た。(ここまで五分かかつてない)

「ふあ～」や～…

欠伸がなんか可愛い…じゃなくて…早く着せなきや風邪引く!

「早く寝なさいね。」

さて、一段落付いた所で麗一が何故倒れてるか確かめないと。

「麗一い？大丈夫？て、顔赤いじゃない！」

顔が赤く、苦しそうに麗一は寝ていた。

「うん、風邪ね。間違いなく。」

こんな所に寝かせられないし、部屋に持つて行くか…。

「ぐう…」

本当に世話のかかる夫ね。

「うんじょつヒー。」

麗一をベッドに落とし（優しく）、額に絞ったタオルを当てる。

「ふう…、これで〇〇くね。」

桃色の髪をかき上げ、服を脱ぎ始める。

「…今度の夫は、いつまで保つかしら。」

そう呟き、布団の中に入る。

「出来るなら、死なないでね、私の愛しい人。」

その閉じた瞳から、光る筋が流れた。

おまけ

次の日

「うわー！ メアどうして裸なんだー？」

分かりません

— て、おい！一度寝すんな！」

離して、なんか疲れてるんですから！」

સુરત - ૧

に な し て !

てゆ二がこの夕方には誰かしたんだ?

「あ、あ、あ、あ、あ、い（知らないい）！」

……いやあ、一体誰か？」

不幸その六 彼女は謎が多いのです。（後書き）

今回の話を読んで、嫌いにならないでください。それだけが私の叫びです。

麗ー「このボケ作者。」

レイン「なに！？ しきなり失礼だよ！？」

麗ー「ふん、お前には作者の資格がない。」

レイン「酷い…セリまで…」

麗ー「これからも」の馬鹿作者をよみじくお願ひします。」

レイン「無視！？ しかも勝手に終わらすなーーー！」

作者との語らい

終わり

またね

不幸その十七 残念ながら彼女は俺の姉です。（前書き）

六話からかなり間隔を置いて出してしまいました。すみません。

不幸その十七 残念ながら彼女は俺の姉です。

えへ、前回熱のせいで正気＆意識を保てなかつた麗一一です。

どうやら俺は風邪を引いたみたいなので、病院に来ています。

「五膳麗」「わん～。」

「はーい。」

今回のメア達は、家でお留守番だ。…正直心配だけだ。

「五膳さんは今日少し熱があつたんですね?」

えらく美人な先生だな。て、待てやーいらあーー

「な、何で姉さんがいるんですかー!？」

セレニーニーいたのは、間違いなく俺の姉でした。

「てか今までどこに行つてたんだよー!」

「ビーチ…地獄?」

「ふぞけんな。」

「本当…本当なのよ…?」

「きなり何言って出すんだこの馬鹿姉。

「だつて上半身吹っ飛ばされたら誰だつて地獄に行くでしょ?」

いや、普通はあの世だろ?なんで即地獄行き?

「てか、上半身吹っ飛んだつて嘘だろ?」

「マジよ、マジ!」

何でここで近寄る。てか、顔近いんだよ。鼻息荒いんだよ。でも何か言い匂い、じゃねえよ!!俺は変態か!

「分かったから、てかマジ顔近いんですけど。」

「いめんじめん。」

てゆうか、また胸デカくなつたな。

「てゆうか、また胸デカくなつたな。って思ったでしょ。」

姉は、嬉しそうに胸を揺らす、じやなかつた。腰をくねらせて、快感に漫つている。

「人の心を読むなよ。…姉さん…?」

姉さんが急に抱き付く。

「 も～、私の事は香奈、て読んでつていつも体に教えてるでしょお
？」

何誤解生む様な事言つてんだよ、馬鹿姉え。

「 馬鹿姉、良いから離れる。」

「 やだー！もつといつしていたいー！」

駄々こねるな。子供かアンタ。

離れろ。」

「 やだー！」

「 放せ。」

「 い～や～だ～！」

なかなかしぶといな。我が姉ながら強い。

「 てゆづか、俺風邪引いてるんですけど。」

「 私の胸の中で癒されなさい。はあ、はあ

そして、馬鹿姉はまた腰をくねらす。

「 てか、苦しいんですけど。」

馬鹿姉の無駄に力強い胸に俺の頭は挟まってる為、脱出不可能。

「もつと興奮して、そして私を食べてー。」

ボキッ

「痛い痛いー離して離してー。」

ボキキッ

「あやあー。」

馬鹿姉は叫ぶと、後ろに飛び上がって自分で自分を抱いた。

「やつれど離さないから痛い田見るんだ。」

馬鹿姉から逃げる唯一の方法。それは、馬鹿姉を抱き締める事。しかも全力でそれをするのだ。当然相手は痛みに耐えかねて手を離す。

「酷いよ麗ちゃんー。」

馬鹿姉は涙田で俺を睨む。

「これやんないでーっていつも言ひてたよねー?」

その言葉、ソックリそのまま返すよ、馬鹿姉。

「抱き着くなつて、いつも言ひてたよな、馬鹿姉。」

あ、馬鹿姉つて言ひちやつたーまあ、いつか

「酷いよ馬鹿姉は～！」

また馬鹿姉が抱きつこうとするが、当然避けた。

「避けないでよ～！」

馬鹿姉は必死に俺を掴まえようとする。

「診察しなくても良いの～！」

忘れてたよ、馬鹿姉のせいだ。

「馬鹿姉が止めればね。」

しかし馬鹿姉め、いつまでやるつもりだ？

「なんか頭痛くなつて來たな。」

しかも頭が割れる様な痛み。

「早く掘まつてよ～！でないと診察出来ないよ～！」

抱きつかんでも診察は出来るだろ、馬鹿姉。

「うー？」

「スキあり～！」

くつ、頭痛が酷くなつた！

頭痛で動きが一瞬止まつたせいで、馬鹿姉は俺を掴まえてしまつた。

「ちひ。」

あ～、最悪だ。

「いただきま～むぐつー。」

「いい加減診察しろ。」

「あ、あふあふあえ。」

「問答無用。」

馬鹿姉がちやんと喋れないのは、俺の指を突っ込んだからだ。

「てゆうか、馬鹿姉医師免許持つてんの？」

馬鹿姉が医師免許持つていて、初耳だよ。

「そんなの、似た様な免許腐る程持つてるしぃ。」

「そりすか、なら早く診察しろ。」

「もお～、麗一ちやん急かせなこでよ～。誤診しちゃひかない

「え…。」

何その違和感のない[冗談。かなり心配になるじゃないか。

「じゃあ始めるよーー。」

「…

その後、無事診察を終えた俺は馬鹿姉を連れて家に帰つて來た。

「ただいまーー。」

「はあ…

五膳麗一 [モチヤマ リイチ]

「お帰り～」

「ふにゃあ～」

メアとヘルが仲良く片足を結んで歩いて来る。てか、二人三脚？
少しヘルの身長が高いせいで大変そうだな。

「「ふわわやーー。」

お～、仲良く転んだもんだ。あ～、ヘル涙目で耐えてるよ。偉い
なあ、後で良い子良い子してあげるか。

「誰？この子達。」

俺が親父臭い思考をしていたら、馬鹿姉はただ呆然とメア達を眺

めていたが、やつとの事で口を開いた。

「えへと、この子達は～…」

じつじょうか、メア達の事を忘れてたよ。

「か…」

「か?」

「可愛らしい…!…!

「ひねー。」

「あやあー。」

「わわわー。」

馴鹿姉は、俺を突き飛ばしてメア達に抱き付いた。

「つぐ、麗ーーーこの人誰?」

「ふわわ。」

「えへと、やれは」

「ねえねえーーこの子達の名前は?」

「メアにヘルだ。」

「可愛こいこい……可愛こ過ぎるのやうなト達ー。」

ナウですか。

「ふわわわーー。」

嗚呼、メア達の悲鳴が聞こえぬかと無視しきつ。

「次回大変そうだな。」

本当に大変な展開は無視しきつ。

「ニヤー。」

「ひひひーー。」

「ひひひーー。」

「はあ、面白いわ。」

いつしり、馬鹿姉妹がついて来た。そして、これから的生活が不安だ。

疲れた。

不幸その七 残念ながら彼女は俺の姉です。（後書き）

評価感想をいつもおまかしておりますへ

キャラクタープロフィール

五膳 麗（ゴゼンレイイジ）

誕生日 2月14日

年齢 15歳

身長 170cm

体重 50kg

好きな物 特に無し。

嫌いな物 ウザイ奴全て

外見

黒髪黒眼。伸びきった前髪は、左目をいつも覆っている為、普段は見えない。身長体重共に普通。中肉中背。

性格及び環境設定

運動神経は結構良い方。趣味は読書。割りと大人しい性格だが、メア達の前では正常ではいられなくなる。少しSである。家族構成は父、母、姉で、姉は高校卒業後に失踪。両親とはそこそこ仲が良かった。しかし、両親は春にあった交通事故により、二人とも死亡。事故の原因は不明。その後、両親の幻覚が現れ、麗二の精神を蝕んでいくが、魔王との出会いにより、幻覚は消えた。しかし、精神的には傷は癒えてはいない。

特技

相手の脳に直接作用する術。

身近な物は殆ど武器に出来る。

次回は、メアについてです。それでは皆さんまた次回へ

終わり

不幸そのハ、彼女は怒ると恐いです。（前書き）

七話からだいぶ時間がかかってしまいました。本当にすみません。
後書きにキャラプロフィールを書いてますので、是非読んで見て
ください。

後、評価感想をお待ちしております。

不幸そのハ、彼女は怒ると感じです。

五膳麗二宅

4時38分

ども、麗一です。

前回、俺の馬鹿姉が突然この町に帰つて来ちゃいました。

そして馬鹿姉が現れたせいで、いろいろと面倒な展開になつてしまい、問題が生まれてしまった。

率直に言つと、馬鹿姉がメア達と見事に御対面を果たした訳だ。
そして

「あははははは…」

「かわいいい！」

「ひにゃーー！」

…なんか大変な展開にな

「あははははは！次！コレー！」

「あやはははははーー！」

「ふわやーーー。」

とにかく面倒なてんか

「わやせねねねー。」

「ふわやあーーー。」

いー加減

黙れえええーーー。」

ガンジー!!シベキンー!

テーブルが強めの踵落とし（俺の）をまともにへりこ、見事に真つ一ツになつた。

「はー。」「

「ひにゃ。」

「うん、素直でよろしくー。」

静かになつたのは良いが、テーブル壊しちまつたなー、どうしよう。

今月は結構出費が大きいのに…。

「あのー?」

「なんだ馬鹿姉。」

「いや、その馬鹿姉つて止めて欲しいんだけど。ー。」

「止めて欲しいなら馬鹿な事をするな。」

「えへ、それはチョット……」

「じゃあ黙れ。馬鹿姉。」

「はい……」

馬鹿姉はかなり落ちこんだらしく（俺の言葉遣いに）、ヘルの肩を借りて灰になっている。

「といひで、馬鹿姉は何故帰つて来た？」

「それはねー！」

自分の話題が出た瞬間に、馬鹿姉は元気を取り戻した。まじづばえ。

「聞きたい！？ね！聞きたいのねつ！？」

近寄んな、抱き付くな、暑苦しいんだよ。

「良いから話せ。」

「昔々、ある所に」

//シミツヘ

「さあ、やー。」

「何話そつとじてゐるのかな、馬鹿姉？」

また力一杯抱き締める。

「分かつた分かつた！話すから止めて麗一ちゃん！」

馬鹿姉を締め付ける力を抜く。

「はあ、痛いよお麗一ちゃんああん！」

「話せ、そして放せ。」

「もう、本当は嬉しいにいくつー。」

図星だよ馬鹿姉。

「…何故来た？」

「無視！？まあいいか。」

「また金でも借りに来たのか？」

昔から金遣い荒いしね、馬鹿姉は。

「違うよー、親が死んだら誰だつて里帰りするわよ。」

「… そうだったな。」

そういうや死んだんだよな、メア達と暮らし始めてからこいつの間にか両親の事はすっかり忘れてたよ。

「だからあ、私はあなたの世話をする為に来たの。」

それは弟思いな馬鹿姉らしい考え方だな。

「心配せんでも自分の世話をへりこ出来るよ。」

それに今はメア達がいるしな。

「せうっ…なら良いんだけど。」

残念そうに俯くが、次の瞬間にはいつもの馬鹿姉に戻っていた。

「じゃあさーじゃあやー。」

何言こ出やうとしてるんだ馬鹿姉。

「明日から私もここに住むよー。」

は？

「両親がいないからねびしいでしょ？だから私をお母さんだとふおへつ、ひひやいひひやい！」

「黙れ、馬鹿姉。」

馬鹿姉がきちんと喋れなかつたのは俺が、頬を本気でつねつたからだ。

「大体家に2年も帰つてこないところのせいでこうの事だ？お袋と親父は毎日心配していたんだぞ？しかも帰つて来たかと思えば1分もいなかつたぞ！」

「ほへんはまにほへんはまに…（「めんなさい」「めんなさい…）」

馬鹿姉が反省したと思い、つねるのを止めた。

「分かれば良し。」

「酷いよお、こんなに痛いのヤダよお…」

「反省してますか？」

殺氣を込めて馬鹿姉に言ひ。

「してます、土下座しても構いません、はい。」

「宜しい。」

馬鹿姉に反省させたは良いが、これかいじりつし

「マキ〇〇マキ〇ーンー。」

「ぐげつーー。」

俺が考えにふけつてると、後ろから脊髄めがけて正拳突きが放

たれ、見事に直撃した。

「ぐう...」

「大丈夫麗一ちゃん！？」

卷之三

—立てる? 麗ちゃん。—

「わざと隠しておいて、何!?」

ノミチ

メモリ ! ! !

俺が大声で呼ぶと、メアは驚いた様な目で見た。

「ほ！復活か早過ぎ！？」

「人に不意打ちがましとして、その言葉か？」

背中の痛みは今最高潮。怒りも最高潮です。

「食らえ！飛び蹴り！」

メアが飛び、俺に向かつて来た。

「せこやあー」

「ゴンー。

だが俺はメアを躊躇し、トレービとのキスを堪能をせた。

「へーーーせぬわね麗ーーー。」

「やつやせじうわ。」

「でもまだよーーー。」

メアはまたも跳躍をし、飛び掛かつて来た。

ぬるー。

「ひぎやーーー。」

飛び掛かつて来たメアをギリギリで避け、そのまま上半身を流れにそつて投げ飛ばした。

「じょーーー。」

かなり痛そうな音だ…

「まだやんのか?」

殺氣を込めて聞く。

「え…いや、もつ良いです。」

「とゆうか何で俺に向かつて来たんだ?」

「だつて構つてくれないんだもの! しょうがなにじゃない」

メア、いつ死んでみる?

「あの~?」

俺がメアに対して殺意を抱いていると、後ろから馬鹿姉の遠慮がちな声が聞こえた。

「何?」

「あの、顔が怖いんですけど?」

「いけね、顔そのままだつた。」

「何? 馬鹿姉。」

「さつきから聞こいつと黙つてたんだけど、その娘達誰?」

「! そういうや忘れてた、って馬鹿姉? 顔がチョットといつか、かなり般若に近付いていますよ?」

「メチャクチャ怖いんですけど。」

横でメアとヘルが抱き合つて震えてるんですけど。

「誰?」

浮氣した夫を責める妻の様に聞く。

「えへ、それはですね~。」

馬鹿姉達に構つてゐるつてこ、すっかり忘れてたよ「コンチクショ
ー！」

「誰？」

あれ幻かな？後ろにお袋と親父が見える…

「だ・れ？」

本当に事なかれおつかな？マジで。

メアを見ると、首を縦横にワンパン振つてゐる。

(本当に大丈夫か?)

(うふうふー大丈夫だからー早くなんとかしてーーーチビつちやう
よーーー)

「誰なのかな？」

「うん、ちやうよ。

いつして全てを白状し、なんとか危機を回避した俺達でした。

「…チビつちやつた。」

回避出来ませんでした…

不幸そのハ 彼女は怒ると恐いです。（後書き）

お陰様で総PV一萬突破！ 本当にありがとうございます！ これからも頑張るので宜しくお願ひします！

キャラプロフィール

メア・クロル

誕生日 不明

年齢 14歳（人間の年齢に換算した場合。）

身長 151cm

体重 秘密

好きな物

スイカ

魔王

麗二

嫌いな物

威張つた奴

外見

桃色の髪と瞳。髪は綺麗なストレートで、腰まで届く。童顔の為、実年齢よりも2、3歳若く見られる。が、その幼い外見とは裏腹に、胸などは結構成長している。

性格と環境設定

基本的に明るい性格をしており、何事も前向きに考える。麗一の事は、異性としてというよりも、兄と見ている。メアと魔王は親子か姉妹のような関係で、よく甘えている。魔王同様、過去については不明な点が多い。

特技

早食い

大食い

いたずら

またね～

不幸その九 彼女はトラブルメーカーです。（前書き）

今回はかなり短めになつてます。すみません。しかもキャラクター
プロファイルが中止になつちゃいました。本当にすみません。

不幸その九 彼女はトラブルメーカーです。

「早く～！」

「ああ、今行くから黙れ。」

「こんにちわ、麗二です。」

「麗一と一緒にお風呂なんて何年ぶりかしら？」

嬉しそうにするな、馬鹿姉。

「は・や・く」

今は夕方で、いつもメア達をお風呂に入れる時間です。

同時に、メア達がかなりハイテンションになる時間帯でもあります。そこまでならまだいいんだが、今日は馬鹿姉までもが一緒に入ると抜かしやがった。正直馬鹿姉が来ると、俺は死んだも同然だ。何故かつて？ 考えてもみろよ。仮にも思春期の男だぞ？ 一緒に異性が風呂に入るってだけで理性が死にかけてるのに、三人だぞ、三人！ しかも一人はかなりのナイスバディと来た。俺、もう疲れたよ…、パトラッショ。

俺が現実逃避をしていると、横で話してた馬鹿姉が不機嫌になつてまた抱き締めて來た。

「…？」

「もう！人が話をしているのに無視するなんて、男として最低だよ
麗二」

「…むが…まつ…？？」

息が出来ない！

「お仕置として抱き締めるわよ～」

し、死ぬ！窒息して死ぬぞ俺！

そんな俺の危機を知らずに、続行する馬鹿姉。

「うふふ～」

うん、殺る。

メキメキイ

「さやあ…？」

うん、反応速度が上がってるな、馬鹿姉。

「酷いじゃな、もが！？」

うん、やかましいから手突っ込んで黙らせる。

「さて、どうしたらいいんだ俺。」

ホントにこの三人と入ったたらヤベェよ。

「早々！」

あー、悪魔の声がする～！

「ひざ」

「遅いよ！」

：行くしかないのかえ？

~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~ ~

五分後

結局入るハメになつたとさ。

「メア、寄るな。」

離れた山廬さんにも、「これかの駄」

「頼むから離れる。そして姉よ、何故この狭苦しい風呂に入ろうとしている。」

「何故つて？御答えしましょう！」

パクンな馬鹿姉。

「麗一と裸で密着したいからに決まつてんじゃないですかあ！」

訂正、変態ブラコン馬鹿姉だ。

「ヒューバー...」

心読むなよ。

「スキアリー！」

馬鹿姉はやう叫んで飛び込んで来た。

てゆうかスキアリじゃなかつたよ？しかも風呂場でジャンプなんてする？普通。

結果。

「ゴシン...」

「ぐあー...」

「あー...」

「あー...」

「ひゃー...」

綺麗に四人の声がハモり、気失った。

ちなみに、俺が目を醒ました時、一時間が過ぎてました。

…最悪だ。

不幸その九 彼女はトラブルメーカーです。（後書き）

今日中にまた出すと思います。そしてこれからも宜しくお願ひします。

不幸その十 彼女が好きです。（前書き）

「んばんわ～、今回はあまり笑えない話です。すみません。ちなみに、完結ではありませんよ皆さん！？」

不幸その十 彼女が好きです。

「ふあ～。」

どうもこんばんわ、眠気全開の麗一です。ちなみに1~2時過ぎで
ます。

「眠い。」

何故こんな時間に起きてるかって？

ポケットから指輪を取り出す。

魔王に会う為に決つてんじやないすかあ！

その紅い指輪を指にはめた。

「おひはよーん」

俺が来た瞬間にすぐ飛び掛かつて来れるつて、どれだけ反射神経
良いんだ？後朝じゃねーぞ馬鹿。

「頼むから止めてくれか？魔王？」

魔王を振り向くと、顔が怒ってやがった。何故？

「魔王じやなくて名前で呼んでよ、麗一？」

「分かつたから離れてくれないか？」

柔らかいもんが形変えてるんだが。

「久し振りに来たんだからもつとやらせて～」

…止めて欲しいのに止めて欲しくない自分がいる。…俺の変態。

「とにかく止めろ。」

「ヒリは自分に勝たねば！」

「駄目 気持ち良いんでしょ？」

ハイ、そうです。

「頼むから離れろ！話が出来ん！後、話が進まんだろうが！」

仕方無く俺は魔王を背負い投げした。

「ふざやー。」

「さて、これで話が出来るな。」

「痛いよお～？ダーリン～」

「痛そうに見えんぞ、魔王。」

それに顔が嬉しそうだし、よだれ垂れてるし…

「そんな事無いよ～？後名前で呼んでって、さつきも言つたよ？」

「うん？名前忘れたから別にこれで良いだろ？」「

本当は忘れてないけどな。

「私の名前はロメア・クロルタリアだよー。ちゃんと覚えてー。」

「ハイハイ分かりましたよ。」

「ハイは一回ー。」

「はーい。」

「といひで話つて何？』

…忘れてたよ。胸の感触で。

「俺が何故殺されなきゃいけないんだ？」

「それは、あの…」

「何隠してる、ロメア。」

俺はロメアの顔を真直ぐ見る。

「分かった。話すよ…。」

彼女にしては感情の籠らない顔で、話し始めた。

「魔王との結婚は、絶対の権力と、膨大な富を手に入れるのと同義

だと呪つ事を初めに呪つておきます。」

そんなオプションがあったのか！？

「しかし、それはあくまで結婚をしたらの話です。」

「どうこいつ事だ？」

「仮に婚約をしたとしても、結婚をしなければ意味が無いこと呪つ事です。」

「や、それはつまり、い、殺

「結婚をする前に殺してしまえば全て無かつた事になるといつ事がす。」

「だから俺は殺されそうになつたんだな？」

まあ、軽くやばい程度だつたな、アレは。

「普通は魔界で一番強い者から選ばれるけれど、そいつは既に始末されていたの。」

「俺、死亡確定？」

「それあなたが選ばれたの。」

「え～！？何故俺になるのそこどー？」

「私が決めたの、貴方に。」

ロメアはその唇を俺のに重ねた。そして、またすぐに離した。

「これでも、貴方は私を選んでくれる?」

ロメアが最初、何を聞いているのか分からなかつた。

「貴方はまだ、私を好きになれる?」

一度にして、やつとその意味を理解し、頭を働かせる。

「ノ女トイツシヨニイレバ、死ヌンダゾ?」

黙れ。

「コンナ女のタメに死ヌノカ? オマエハソソナニ死ニタイノカ?」

黙れ!

「コンナ女ジャナクテモ、イイ女ナラマダイツパイイルダロウ?」

黙れ幻! !

「ヲサマセ、ソシテヨクカンガエロ。」

「黙れええ! ! !」

叫んだ。次の瞬間には、俺は叫んでいた。

「選ぶ？じゃねえよ！！！初めから決まつてんだよ…。」

「うだ。あの時から俺は、決めていたんだ。

(宣しくね ダーウィン)

もう、決まっている。

「どんな不幸に見舞われようが、俺はお前が好きだ…。」

もう、どんなものが來ても俺は…。

「お前を好きでいる。たとえ世界が俺を殺しにかかるって來ても、だ。」

「

俺は言つ終えると、急に恥ずかしくなつてきて、顔を逸らす。

「ありがとう、麗一。」

その声に反応し、ロメアを見ると、大粒の涙を流しながら笑っていた。

「ありがとう。」

俺はロメアを抱き締めた。

「別に礼を言つて貰つても困る。これは俺の意思なんだから。」

「ありがとう。」

「だから、礼はいらねえよ。」

ロメアを一度離し、口付けをした。今度は可愛いからではなく、好きだからキスを交わした。

「うひひこそ、ありがとな。ロメア。」

俺は危険という理由で彼女から手を引いたくない。この先どんな事があっても、俺はお前を好きでいる。

ずっと。

不幸その十 彼女が好きです。（後書き）

え、今日は、キャラクタープロフィール無しです。すみません。
てゆうかすみませんが多すぎー後、次回からは少しタイトルの書き方
方が変わってます。

では、また次回お会いしましょう。

不幸その十一 彼女の料理は普通に美味しいです。（前書き）

ども、おはようございます。レイン氷花です。
前回、サブタイトルの書き方を変えるとかぬかしてましたが全然
変わつてません。

不幸その十一 彼女の料理は普通に美味しいです。

「今何時！？」

ども、今起きた麗一です。今日は入学式で、当然早く起きなければいけない日なんだが、こいつめの日に限って寝坊をしてしまう自分が怒りを覚える今日この頃。

「つーか、メア達がいねえな。」

昨日あんなに遅く寝たのに早え。

まあ、その前に着替えよう、制服に。

五分後

「着替え終わったのは良いが、田覚しはどうして鳴らなかつたんだ？」

田覚しがある所を見ると、そこには真つ一つになつた田覚しが…

真つ一つになつた田覚し…

「誰だああ～…田覚しを真つ一つにしたやろ？はあ…！」

大急ぎで一階に降りよつとし、見事に足を滑らして転がり落ちた。

「ががががががががが…！」

「パン！！」

「し、死ぬ…」

俺は盛大に顔面を強打し、激痛に床を転げ回る。

「いっつう…」

誰かいないのか？少しほは心配してくれてもいいのによ。

「てゅつかキッチンにいんのか？」

声がそこから聞こえるんだが。

「お～い、何やつてんだお前ら～。」

「あ、起きたの麗一～？」

「うん、まづはおたまを持つているメアだね。めちや不自然だ。

「ふに～？」

続いて、エプロンを着たヘル。うん、可愛い。今直ぐに抱き締めたいくら。

「麗一ちやんおはよ～」

最後に、眼鏡にエプロン姿、ウサマで裸かよ。違和感バリバリだよー田の保養にはなったけどな。

「朝つぱらからおめえ何してん?」

「「朝」」飯……」

「ひにや?」

ヘルだけハモッテねえ~。

「分かった。とつあえず目覚しを壊した奴出て来い。」

「なんか問題でもあつたの?」

馬鹿姉よ、問題ありすぎだ。

「反省の色が見えないので処刑します。」

「ま、待つて!~悪気があつたわけじゃないんだよ!~安眠を邪魔する物は滅んで当然じゃない!~」

「死刑。」

ぎゅーーーーーん!!~

馬鹿姉をどうしているかは御想像におまかせします。

五分後

「はあ、朝っぱらから無駄な時間を使ってしまった。」

「ナニが悪いの、なら、やらないで、よ…」

がくつ

馬鹿姉は力尽きた。

「俺は学校だから行くぞーー？」

「えー！？」

うん、メアと馬鹿姉がハモったな。てか馬鹿姉復活早え。

「なんだ？なんか用なのか？」

「え…、朝食食べないの？」

「朝食？そういうやつたとか抜かしてたな。」

どんな味か…、恐え～よ。考えたくねえよー考えたけどさ。

「では言つておま～す…」

危険回避…出来ませんでした。

「…何してる？ヘル。」

ヘルが俺の腕をがつちりロックしてやがる。

「食うしかないわけね。」

渋々テーブルにつき、料理？を見る。

「多分、大丈夫か。」

「見た目は普通だな。」

「酷いよ麗一ちゃん！一生懸命作ったのにいい…！」

いや、馬鹿姉の事じゃ無いからね？メアの事だからね？

「さあ、呑じ上がれ！」

メアよ、笑顔ですすめないでくれ。心が痛む。

試しに一口食つ。

……

「……つまーいな。」

「でしょー!?よく魔王様に褒められるんだー！」

「信じられん。あの、自分で服を脱ぐ事すら出来ないメアが…」

「それはメアちゃんに対して失礼よ?麗一ちゃん。」

「驚天動地だ。明日は隕石が降るな。」

それとも世界の終わりか?

「気持ちは分かるけど美味しかったでしょ?」

「分かるのー?」

そりゃ驚くよなメア。てか分かるよな?馬鹿姉。

「さて、朝飯は食つたし行きますか!」

「「早川……」」

「行つてきま～す!」

バタン!

「…」

「…」

「行つちやつたね……」

「行きましたね。香奈さん……」

「うそ……」

「あつー!」

「なに? メアちゃん。」

「ひにゃ?」

「大事な事を言い忘れてました。」

「アレか。」

「ひにゃ?」

「私も学校に行くつて事。」

「ま、良いんじゃない?」

「ですね」

「ふーせー」

「あはははははー!」

「ホントに大丈夫だよね?」

.....

.....

.....

不幸その十一 彼女の料理は普通に美味しいです。（後書き）

今回の出来栄えはどうでしたか？
相変わらず駄文で、面白みの無い小説ですが、これからも宜しく
お願いします。

はい、今回もキャラクター プロフィール無しです。すみません。
変わりと言つてはなんですが細かな設定等紹介します。
では、また次回にお会いしましょう。

紅い指輪。

魔王の寝室に魔王以外の者が行く為の唯一の鍵で、指にはめている間、だけ寝室にいられる。外装は、深紅のリングに小さいルビーがはめ込まれている。その価値は値段が付けられない程で、よく争いが起きてしまう。ちなみに、生き物以外は使えないようになってい る。

終わり

またね～

不幸その十一 彼女は無口です。（前書き）

どうもお久し振りです！ 今回はあまり面白くないです。
すみません。力不足で。

不幸その十二 彼女は無口です。

- 1 -

۷

۷

۷

ども、おはよー。麗一です。無言のスタートです。何故そうなったかは一分前。

~~~~~

一  
五  
九  
八

大きな欠伸をし、人気の無い通学路をノロノロと歩く。

眠

あれ？ 眠気のせいで意識が朦朧として来た…

「つまみー？」

目を擦つてた時に、石に躓いてしまってバランスを崩しかけたが、なんとかクリア！

ガツッ

「て、うあーーー？」

更に右に躊躇、前を歩いていた女子の肩を掴んでしまった。

「？」

当然肩掴まれば振り向くのが人というのも、そして振り向かれた事でまたバランスを崩した。

「さやあーー！」

「ーー？」

見事に俺は彼女を押し倒してしまい、はたから見れば無理矢理押し倒した様にも見える体制に。

「…」

「…」

で、最初に戻る。

「…」

「…」

何?この空氣…

۷

何か喋つて！？

- 1 -

彼女は無言で俺を見ている

- 1 -

もしかして、  
気絶してゐ?

顔の前で手を振つてみる。

13

反応アリイイイ！！？

「いや、そのわざどじや無いからなー?」

- 1 -

はい必死の言い訳無視いいいい！！！

「その、済まん！」

頭を下げるとき、胸に当たつた。

「け！？」

今のは俺、驚いたせいで変な声出しちゃった。

「…？」

「いや、あ、え！？」

「…」

「すまん！…？」

「…」

なおも彼女は無言。

「とつあえず退くなー。」

俺は急いで立ち上がり、仰向けに倒れている彼女を起こした。

「…」

ハイ無言。

「あの、出来たら名前教えてくれないか？」「

今更なんだが、コイツ眼鏡付けてたんだな。どうでもいいけど。

「…」

「あの、やつぱつ…」

「…」

?今、微かに…

「…姫川…」

今度は少し聞こえた。

「…姫川來桜…」

ひめかわくおづ?なんか、変な名前だ。人の事言えんけど…

「來桜か…、よ、宜しくな!俺は…」

て、うおーい!!待てよ!

スタスター

俺の名前は聞かずに行きやがった…

「…俺…嫌われたかな?」

そうだよね、いきなり押し倒す奴なんか関わりたくないよな?

「あはははは…うつ…」

涙出て来た。

そうして、俺は泣きながら登校した。

## 不幸その十一 彼女は無口です。（後書き）

どうもー、だらだらと学校編に入らなくてすみません。  
これからはもっとがんばりますので宜しくお願いしますーー！

不幸その十三 彼女は個性的な先生です。（前書き）

だんだん、ネタが湧いてきた…

## 不幸その十三 彼女は個性的な先生です。

どうもお久し振りです！お馴染みの麗一です。

今俺は入学式を終え、これから一年間世話になる教室で先生の自己紹介を聞いています。

「オッス！これから一年間テメヨラの世話をする天王寺萌だ！宣しく！」

これがこのクラスの担任だ。

「じゃ、ホームルーム終わりって事でー！」

待てやー！

「あ、そういう言ひ忘れてた。」

先生が足を止めて、教卓に戻つていく。

「俺は普通の教育は嫌いだ！義務教育？体罰禁止？そんなものはいらん！ゴミ箱に捨ててくれ！」

いやいや、先生が言つて良い事か？

「後、これは大切だ。これからお前達の自由で五人グループを作ってくれ。もし誰かが何か起こしても、クラスのみんなには迷惑はこ

ない。代わりに、そいつと同じグループの奴が迷惑を被る。そういう制度を作る！良いな！」

なんか個性的な先生だな。

「後、グループは一年間変えないからな？以上。」

今度こそ、先生はどつか行ってしまった。その途端クラスが賑やかになり、グループについての話し声が響き始めた。

「ふう～…。」

しかし、初めて見る奴ばっかで溶け込めねー！クラスの奴等はみんな顔見知りらしく集まってるし、どうしょー！

「あの～？」

「なんだ？」

振向くと、そこには氣の弱そうな男子がいた。

「いや、その、同じグループにならうと声かけたんだけど、ダメかな？」

お、おーーー！救世主だ！いや仲間だ！俺と同じく顔見知りがいい仲間だーーー！

「喜んでーー！」

「ホントーー？ありがとうーー！僕孤独で死にそうだったよーー！」

「鬼かここに〜」

「ヒーリーお前の名前は？」

「清水…美花だよ。」

「清水か…」

清水は、少し茶色い髪と瞳、小作りな顔をしている為、美男子と  
ゆうよりも可愛い系だ。小動物みたいで。

「で、グループは？人数にあてはあんのか？」

「うそ…あるにはあるんだけど…」

「どうかしたのか？」

「彼女、ちょっと声がかけずらいくて…」

「そんな事なら手伝つてやるだ〜」

「本当…？ありがと〜…」

「ここまで喜んでもらえたら嬉しこよ。

そして、俺は元気良く問題の女子の所まで来た。

「よひー。」

「ああ？」

うん、かなり恐いね。

その女子は黒髪のストレートで、背は俺より少しだけ小さい感じだ。

「俺達と同じグループになつてくれるか？」

その女子は、その鋭い眼光を俺に向けたまま考え込む。

「お~い、出来るなら田伏せてくんね？恐いかひ。」

なんか殺意すら感じじる。

「で、どうだ？」

ついに囁つきが悪い。

「ちよづじ良い、私もそれに困つてた所だ。」

「お~それじゃあ…」

「入る。」

「よし！グループ作り終わる！」

なんか忘れてるような感じがするが無視無視！

「ふあ～…」

さて、残りの時間は昼寝しよ。魔王と会つて寝不足だから…

「おひなー！」

ドッゴオオオン！…！

轟音と共に、我がクラスの担任、天王寺萌先生が扉を壊すくらいの音をたてて入つて来た。

訂正、扉壊てる。

「忘れてたけどよ、午後から遅れて来る生徒が一人来るからな。あと、グループは五人だぞ？忘れてた奴がいるから気をつけろよ？」

先生、なんで俺を見るんだ？先生は読心術でも使えるのか？ええ？そうですよ、忘れてましたよくそつたれえ…！

「後一つ、最後に決まったグループは生徒指導室に来る事。来なかつた場合、停学つて事で。」

停学！？

「じゃあまたなー、麗ーいー」

クラスの視線が俺に集まる…つて怖い！なんか殺意の籠つた視線が来てるんだけど…！主に男子から。

「あのー？」

「ん？」

「グループの人数、後一人だけど……ね。」

「コイツか……暗い顔して何だつてんだ？」

「後一人しかいないんだ。」

「?.?.?.?の意味？」

「つまり、他はもう全部決まっていて一人しかいないんだ。余つて  
るのが……」

それはつまり？

「僕達は最後つて事だよ。」

嘘…

「残念ながら、生徒指導室行き決定だよ……。」

終わった……ん？

「待てよ？余りは誰なんだ？」

美花は俺の前の席を見る。

「あの子だよ。」

前にいて気付かなかつたよ……なんかすまん。

「ふうん。」

その女子のまつを見ると、まず黒髪のショートが見えた。

「おー。」

その女子が振り向く。

「…何？」

眼鏡を上げたままの姿勢で振り向く。

「…？」

え…？

「来桜？」

「…今朝の…」

同じクラスだったのかよ！

「今朝はすまん！アレは事故で」

「…いい」

え？いい？それって許すって事なのか？

「…何？」

「あ、そうだった。」

すっかり忘れてた。

「来桜は余つてるよな？だから俺達と同じグループで良いか？」

「…良い。」

「ホントかー？よし！後は午後から来る奴入れて終わりだ！」

「うん、そうだね。」

『パンポンパンポン 麗一がいるグループはすぐに来い！以上！』

「…」

「早いな。」

「おうひお！」

いつの間にか横にあの眼光の女子がいた。ついでに来桜も。

「じゃ、じゃあ行こうかーね！？」

うん、天敵の登場でテンパりますな。

「さて、行くか。」

ついで俺達は仲良く、生徒指導室へ行きました。

不幸その十三 彼女は個性的な先生です。（後書き）

魔王はドミー？お楽しみいただけたでしょうか？

クレームなども一応受付けています。

では、またお会いしましょう。

不幸その十四 彼女は喧嘩好きです。（前書き）

ども、こんばんわ～

スランプを抜け出しました！！

そして、読んでいる読者の皆さんあつがとうござります。

これからも、レイン氷花はマイベースで頑張ります！！

不幸その十四 彼女は喧嘩好きです。

「……か」

「ども、麗一です。今生徒指導室の前に立ります。何故ここにいる  
かつて？御答えしましょう！」

「早く入れ。」

「すみません。だからそんな恐い眼で見ないで下さい。」

「そういや今前聞いて無かつたよな？」

「今更気付いたか。」

「とにかく、俺は麗一。で、お前は？」

「黒川琥春だ。呼び捨てで良い。」

「ふうん。じゃ、行くか。」

「…………」

「失礼します。」

「どうぞ。」

先生のだるそうな返事を聞き、生徒指導室に入る俺達。

「お～？なんだお前かあ？なんでも～？」

あなたが呼んだからだろが。

「まあ座れ。」

一列に四つ並んでいる椅子を指差す。

「で、何話すんだっけ？」

人呼んどいて忘れただ～？」

「先生…」

清水が遠慮がちにきりだす。

「ああそつだつたな。何か話すんだよ。うん。」

まだ思い出しても無いのかよ。

「あ、麗～。」

「な、なんですか？」

「そんなんに構えんなよ。悲しくなつて来る。」

…すみません。

「午後から来る生徒について説明したいんだが、お前に。」

何故俺？

「何故俺？つて、一緒に住んでんだろ？」

「は？ てゆうか先生心読むな。」

「良いじゃんか別に。」

「良くねえ！」

大体、馬鹿姉にしろ、この先生にしろ、俺のプライバシーは無いのかあ！！！

「…無い」

え、来桜？ 君もしかして俺の思考…

「… 読んでる」

… 明日から学校来なくて良い？

「ダメだぞ、麗一。」

「… だめ」

二人共、どんな教育受けて来たの？

「トップシークレット」

「…内緒」

そすか。

「だいぶ話がそれだけ戻すぞ。」

勝手にして…

「メア・クロルって、お前の同居人だろ?」

え?

「…嘘だろ?」

「ホント」

一つ質問。

「どうやって入学した？」

「知らねえよ。」

「そんな先生…人事みたいに言わなくとも…」

「だつて人事だし。」

「冷てつ、例えるならヘルがお漏らしした布団みたいに。」

「例えるなら簡単な物にしろや。」

「それらしい例えが思い浮かばねえんだよ。」

「ほう？少し担任に対して口の聞き方が悪くねえか？」

「あんたを担任とは認めたくねえ。」

「ほう！私に喧嘩売つてんのか？」

「八割方は。」

「よし、表出るーーー！」

「先生！話が逸れます！」

俺と先生がドアを開けた時に清水が止めに入った。

「邪魔だ生徒。」

え～！？清水の名前覚えてないのかよ！清水なんか悲しい表情してるんだけど！！

「屋上が丁度良いだろ？」

「この先生、喧嘩好きか？」

「てか、怪我しても知りませんよ？」

「臆病者め。」

「誰が、臆病者だって？」

「ああ？」

「おう！結構良いいシラしてんじゃねえか！」

「どっちが強いかハツキリさせいやる。」

「うして、俺は何故か先生と一緒に戦を交える事になってしまった。  
…誰か変わって！！

## 不幸その十四 彼女は喧嘩好きです。（後書き）

今回の感想は？出来栄えは？まあ、気にせずにこれからも頑張ります！

麗一「仮にしねや。」

## 不幸その十五 彼女は怪力です。（前書き）

でも、おひやしげぶりです！今日は続々物です。（一応）

## 不幸その十五 彼女は極力です。

「眠い…」

ども、眠気全開の麗一です。今、先生と喧嘩する為の場所に向かつてゐる。前回の些細な事で喧嘩に発展してしまつたせいで。うん。

「先生喧嘩好きかよ?」

と、振り向いて清水に問い合わせる。

「なのかなあ?」

清水は頭にクエスチョンマークを作りまくしながら、上の空で答える。

「しつかし、変な先生だな…。」

眩きながら、前を歩く先生の後ろ姿を見る。

考えれば考える程変な先生だ。

「着いたぞ。」

と、悪戯つ子のような笑みを浮かべながら言つ先生はとても楽し  
そうだ。

やつぱり喧嘩好きか、先生。

「「つむ？」

屋上にこなした瞬間、俺は思わず声を出してしまった。

「喧嘩になもつていいだろ？」

先生は、だるい？みたいなノリで叫ぶ。

何故俺が屋上に着いただけで驚いたのか、理由は屋上にある。床がコンクリで柵が鉄製、ここまでは普通だ。だけど広さが異常だ…。屋上に体育館が二つ入るくらいの面積があった。体育館二つ分くらいの面積をどうやって屋上に作ったのか、そしてどうして作つたのかといふ疑問はさておき、柵もちょっと普通じゃない。何故こんなに頑丈に、これでもかつてぐらぐらに出来てんだ？

「気にしない気にしない。」

気にしない、先生。

「で、ここにいるんですか？ 喧嘩。」

あやかと思いつつ、聞く。

「「つむー。」

既に柔軟体操をしてくる先生が無駄に元気な声で答えた。

「止めた方が良じよめ麗一君つー。」

清水が必死に止めようとするが、先生はあっち行けつという具合に手を振り、俺は丁寧に断つといった。

「そろそろ行へべー・麗ーーー」

5m前に向かい合って立つて、闘志をむき出しに叫ぶ先生。

「ひつちも良いぞ先生！」

それに叫び返す俺。

「ルールは？」

一  
無制限

ニヤリと笑う先生。

ヒュウ一

「始め！！！」

先生の合図を屋上に響いた。

ドガーン！！！

1

突然、轟音とともに視界が遮られた。

ヒュンシ

「おわっ！」

粉塵に紛れて見えない前方から来た拳をかわし、素早く後ろにさがる。

ブンッ！

「……？」

ドガーン！！

またコンクリートの破片と粉塵が視界を遮るが、今度はしつかりと見た。あの瞬間に先生は跳躍し、かかと落としをする体勢に入つていて、先生はそれまでの動作を一秒以内に行つていた。

…まず一言。

「あんた人間か？」

「そうだぞ？失敬な事抜かすなよ麗一。」

粉塵の辺りから声が帰つて来る。

「今の一撃…」

威力が桁違い、てか当たつたら人生終わりDEATHよね。マジで。

「オラアー！まだまだ行くぞおおーーー！」

先生改め、怪物が向かつて来る。

「はあ…、俺つてつくづく…」

不幸だ。

ドガーン！－！

誰か幸せくれ。マジで。

## 不幸その十五 彼女は怪力です。（後書き）

今回はかなり書き方が変わったると思いますが、ムラがあると困つので、ご勘弁を。

不幸その十六 彼女は喧嘩強過激者か。（前書き）

ども、お久し振りで～す。

最近は更新速度が鈍くなつてしまつてスイマセン。

今回の出来栄えはいつも通り？だと思ひます。（多少分）  
まあ、そんな事は置いといて、と。  
楽しんでください！

それでは、本編です！！

ちなみに、今回は久々にキャラクタープロフィールが在ります。

不幸その十六 彼女は喧嘩強過ぎます。

ドガーン！！

踵落としがコンクリートを破壊する音が響く。

「△△！」

それを避ける俺。

「やるねえ！麗一い！！」

興奮した先生の声が屋上に木霊する。

やるねえって、避けなきや粉々になるのが分かつてたら誰だつて必死に避けるだろうが。

ちなみに、俺達は今屋上にいる。屋上はかなり広く、この学校の体育館と同じくらいの面積だ。柵は二三㍍くらいあり、とても頑丈そうである。以上。

「ふん！」

先生がコンクリートにめり込んだ足を引き抜く。

化けモンか、先生は。

そして、それを確認した俺はすぐさま後ろに下がる。

「行くぞ！！」

氣合いの入った声とともに、先生が躍る。

どれくらい跳んでんのアンタ！！？

先生は次の攻撃の為に  
空中で体勢を整える

おおにわあわ

ドガガアーン！！！

「…また…」

先生のかかと落としが破裂し、そしてコンクリートの破片と粉塵が舞つて視界が遮られる。

「マジ死ぬ！！」

何故俺が今危ない目にあつてるかは前回の最後のほうを読めば分かる。うん。

「アハハハハハハハハ ! ! ! ! ! ! ! !

狂つた！？

「終おわありにい！――！」

「しまつー！」

俺の一瞬のスキをつき、先生は俺の懷に潜り込むと、勝利の雄叫びを上げた。

そう簡単に負けるか！！！

考えろ！

相手は既に俺の懷に入つて、攻撃の体勢に入つてしまつてゐる。避ける事は不可能か。

くそつー！これは使いたくなかったが、そもそも言つてらんないし！しかも、ヘルに使つた時に失敗しちまつたが……！

仕方ねえ！これにかけるか……！

ドガーン！！

次の瞬間、必殺の右ストレートが決まつていた。

バキミシグシャー！！！

骨が折れ、肉が潰れる音がした。

「あーたありい！……ん？」

先生が異変に気付き、右手の先を見る。

「！左手で防いだ？」

先生は声を上げ、体勢を整えようとしたが、遅い。

「終わりです。先生」

俺は深呼吸をする。

「なつ！」

先生は俺の意外な行動に面食らって思わず声を出した。

「すうー…」

俺は呼吸を整える。

「良く聴け！これが俺のーー！」

最初で最後の反撃だ！！

「\$%£@%&

%+¶!—!—!—!

¶

屋上に、俺の声が響いた。

「なんだ、これ…？」

先生の体から力が抜けていく。そして、段々と意識が消えてきた。膝を地面につき、前に崩れ落ちようとした所で俺は先生の体を支える。

「危ねえ！」「

このままだつたら殺られてたぞ？

ズキッ！

「？！くそっ…！左腕の痛みが今来やがった！」

視界が闇に薄っていく。

「どうが、なんで俺こんな目にあつてんの?」

大体  
なんてこんな怪我負うたんだぞ

意譜が完全に途切れた

۱۰۷

... 151

「 病院だよ、麗君。」

寝たままで、首を声の方に向ける。

無様だ、たそ？あたしを避け回してるのは

「  
無様」

琥春よ、お前が戦つてみる。何も言えなくなるから。

「…」

そして、來桜さん？そんなつまらない物を見る田で見ないでくれ。  
…涙出て来るから。

「で、でも良かつたよね！左腕の手術が無事終わって！」

は？

「え…それ、どうい…？」

「え？ だつてあんなにグチャグチャになつてたらもう、手術するし  
かないよ？」

ちょい待て。

「今何時？」

「九時だよ？」

おいおい、大変じやねえか！

「晩御飯を作りー…」

急いで立ち上がろうとしたら、突然視界が90度傾いた。

「寝てる。今は麻酔のせいで体が上手く動かんだろう？」

琥春が諭すように囁く。

「アーティストベガ」

俺はまたベッドに横になり、天井を見上げる。

「…でか、手術代どうしよ…（・・・）」

冷や汗出て来た

一 大丈夫だよ、麗一君

「… 美花? どうゆう意味だ?」

手術代はいらなしそう?

一  
え?  
「

たまでに、おじさんの病院だから

あたまへ止む  
え?

あ……そうた、入院費も無料だからね？」

噓  
ん  
！

「てが入院すんのかよ！！」

二ヶ月ね

またまたうそ〜ん！

「良かつたな、麗一。」

と、琥春が同情をこめた視線で言う。

…ハート持つて来てあげる…

と  
來桜か咲く

いやあなた麗一、また来るよ

暖春が別れの擁護をし  
退室した

...のなに

死神は子供たに語るよ  
死神は子供たに語るよ

儀も帰らないと  
し、あれ、麗一君  
また田田来るわ

と  
美花も帰ってしまった

1

寂シイー！！！

一  
寝よ

そうして、俺は入学式当日から入院するはめになってしまった。

俺、この学校でやつていけるかな？

## 不幸その十六 彼女は喧嘩強過ます。（後書き）

今回の出来はどうでしたか？

麗二「聞かなくとも分かってるだろが、アホ作者。」

レイン「生きてたのか？麗一。」

麗一「おう？なんだそのなんで死んでないの？みたいな視線は？テメヒやつぱりわざとー！」

レイン「ハイハイ！ではさよなら～～～！」

麗二「逃げるなあ～～～！」

次回にご期待。

キャラクタープロフィール

ロメア・クロルタリア

誕生日 12月24日

年齢 15歳（人間の年齢に換算した場合。）

身長 166cm

体重 秘密

好きな物

麗二

メア

チーズ

嫌いな物

金

貴族

外見

銀髪紅眼。肌は白く透き通るようなほど白い。スタイルは良い。右目が無く、普段は眼帯をつけている。

性格及び環境設定

性格は、基本的に自由奔放。しかし、真面目な一面もある。好きな人には尽くすタイプ。ちなみに、人見知りする方である。メア同様、過去については不明。

## 不幸その十七 彼女は大人失格です。（前書き）

ども、こんにちわ～！最近更新鈍くなつちやつてスイマセン。マジで。

後、最近麗一が変態に近付いてるよつて思つのは私だけかな？まあ、そんな事はどうでも良いこととして、と。

言い忘れてましたけど、第11部分からは学校編です。学校編はバトルが多くなってきます。

では、本編です。

## 不幸その十七 彼女は大人失格です。

「歩くのだりい！」  
「歩度不幸な麗一です！  
予想よりも早く病院行きになってしまった。と、思つてゐる今日この頃。

「そういや昨日麻酔打つたんだっけ？体がゆう事を聞かん。  
そんなどうでもいい無駄な事を考えながら歩いていると、いつの間にか目的地に着いていた。

「リリが、先生の病室か……。」

朝から探し回つてやつと見つかった先生の病室の前で心を落ち着ける。

案外もう起きてるかもな。なんたつて化けモンだし、うちの先生。ところが、ドアをノックしても反応は無かつた。

「…寝てるのか？」

恐る恐るドアを少し開け、中を覗く。

「やっぱ寝てんのか？」

ドアを更にもう少し開け、静かに入る。

「…せんせー?」

反応無し。

俺は先生が寝ている（※分）ベッドに近付く。

さっぱり寝ている。

ベッドでは、先生はべつすこしと寝ていた。

「す、一、…」

寝てる時は静かだな、先生。それに綺麗だし。

「…う…?」

おひ?せつとお皿覚めか?

「…?」

「起きたのか?先生。」

「い、は?」

「病院。」

「病院?」

「そ。」

「あちやー、負けたのか私。」

「違う違う、引き分けだよ先生。」

「？」

頭の上に?を浮かべている先生に左手を見せる。

「?それは…」

「あんたの攻撃を防いだせいで俺は氣絶しちまつたんだぞ?そのせいで先生を氣絶させた後に、左手の痛みで氣絶しちまつたしな」

骨も肉もグシャグシャにされたからな。

「すまない…、初日から怪我負わせて…」

先生の顔が少し暗くなる。

「気にはんなよ先生。別に気にしてないから。」

「いや、その怪我だと入院しなければならないだろ?」

「大丈夫だ。入院費とかはいらないって、美花が言つてたぞ?」

「美花に払わせたのか!?」

美花、お前名前を覚えていらっしゃるぞ！良かつたな！てか、払わせたつて、…俺はそこまで酷くないぞ？

「この病院は、美花のおじさんが院長なんだよ。だから入院費無料にしてもらえたんだよ。」

「そなの？」

「そうなんす。」

先生、そんなに驚いてるって事は、知らなかつたんだな…

「いやいや、知つてたぞ！？

「ハイハイ）。分かりました」

「信じてないなあ！？絶対！？」

「信じてますよ～」

「へう～！～！」

ハツハツハ。面白いな、先生。

「ところで先生…」

「なんだ？」

俺は疑問を素直に口に出した。

「学校大丈夫ですか？」

「へ…？」

先生の顔が赤から青に数秒で変わる。

「うわあああん！…どうしちゃうしょー…！」

「取り乱すな、先生。」

「だつて、入学式当日に問題起いしたし、屋上ボロボロにしたし…どうしちゃうしょー…！」

髪をクシャクシャにかきむしり、動搖している先生を見て思う。

将来こんな大人になりたくねえ。

「どうしちょー…！」

静かに元気よ、先生。

「どうしちょー…！」

…

「どうしちょー…！」

「…」

「 \$ € & \* § 」

「

バタン…

俺は先生に子守歌を歌つてあげた。

「さて、部屋に戻るか。」

寝ている先生の顔を見る。

「…す、少しだけなら良いよなあ？」

「す…」

寝顔可愛いな

じつして、俺はその後30分くらい眺めてたとせ。

おまけ

その後

「こんな所で何をしているのですか！？」

「い、いや何も…？」

「嘘をつこうも駄目です…そんなに顔近付けておいて今更じりま  
つくれても通りませんよ…？」

「いやー…これほんとうですかね…？」

「なにがちょっとですか…？…もう良さです…あなたとこれ以上  
話しても無駄です…！今度またこんな事したらタダじゃ済ませま  
せんよ…！」

「いやー…だからひひじやなくつて…」

「わざわざ部屋に戻つたから…」

「はいにこ…」

看護婦さんに怒られた。

「これではまた対策を考えなければいけませんね…」

後、その日から看護婦さん達に変な田で睨られるようになった…。

ちなみに、看護婦さんの名前は山崎清美と書かれてます。

不幸その十七 彼女は大人失格です。（後書き）

ども、今回も読んで下さった皆様ありがとうございます。次回をお楽しみに！！

不幸その十八 彼女は結構優しいです。（前書き）

ども、こんにちわ。

読者の皆さんお久しぶりです。

長い間ずっと更新してなくてすみません。

これからは毎週一回は更新します。

では本編です。

## 不幸その十八 彼女は結構優しいです。

「暇だ…」

ども、病室で窓の外を羨ましく眺めてる麗一です。何故入院して  
るかは聞かないでください。思い出したくないので。

「暇だ…」

誰か来てくんねえかなあ。

「暇で死にそうだ。」

そんな俺の意志が神様に通じたのか、病室のドアがゆっくりと開  
く。

「え…？」

来たのは、意外にも來桜だった。

「…」

「…來桜？」

來桜は分度器でしか計れない程微かにつなずく。

「で、お見舞いに来たのか？來桜。」

來桜の格好は、膝まで届くフード付きの茶色いコートに、ジーパ

ンとゆう格好だ。

「…うん」

「そうか。」

「…うん」

「…」

「…」

「…」

は、話が続かねえ！！！折角見舞いに来てくれたのは嬉しいんだ  
が、この…－この沈黙はキツい－キツ過ぎる－－

「…」「レ」

そう言つて、右手に下げていた袋を渡す。

「え…？これって、果物？」

デパートの袋に入っていたのは、林檎2個、メロン1個、ミカン  
3個、後何故かモヤツ〇ボール…？

「あ、ありがとな！こんなに果物くれて…」

何か見た目よりも優しい奴なんだなあ、來桜つて。

「…やして」「」

もう一つ、今度はフードに入っている物を差し出す。

「…」

そしてそれを何とか受け取る。

え…何故フードに入れてるのかな?

「…秘密」

そうすか。てか心読むなよ。

「…」

はい無言~。

「…」

あの~、またこの沈黙?

「…」

「…」

「…」

「…」

「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」

といふえず、袋に入っていたモヤッ〇ボールを出してみる。

「…あの、来桜さん？」  
「…何？」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」

「お腹空きました？」

果物ナイフを取り出し、林檎を手に取る。

「…少し」

「じゃあ、今林檎剥くからな。」

林檎を剥こうと、ナイフを鞘から取り出そうとする時こ、来桜の手が邪魔した。

「？」

「…私が、やる」

ナイフを俺の手から奪い取り、慣れた手つきで剥き始める。

上手いな…

「… ハレ」

いつの間にか來桜に見とれていた為、林檎を剥き終わったのが分からず、返事が遅れた。

「あ、ああー！ ありがと來桜！」

自分の顔が引きつってるのがよく分かつた。

「… 食べれる？」

來桜が俺の腕の状態を気にしてか、心配そうに聞いてきた。… 無表情で。

パス

無言に耐え切れず、リンゴを一口食つ事に逃げた。

「… 美味しい？」

うん、美味しい。

それでこの沈黙が無けりやあもつと美味しい。

バス

「…來桜、思つたんだが今つて普通に学校だよな？」

「…そうだよ」

「じゃあ、なんでここにいるんだ？」

まさかこんな真面目そうな子がサボる訳ないしな。

「…サボり」

その通りだつたぞコノヤロウー！

「ど、どひじて？」

コンパンを目の上に戻して來桜の目を見る。

「…その方が、楽しいから」

「はい？」

意味が分かんない。

「…麗」と、いた方が楽しいから

な、何ですと…？

「…兄と、一緒にいるみたいで」

「… そうか。」

ちょっとぴり残念だ…

そして俺は綺麗に切られたリンゴを口に頬張る。

うん、やっぱり美味しい。

「てか來桜、兄がいたんだ。」

「…いた」

「ふうん、元気か？」

「…………」

返答無し…？

「どうかしたか？來桜。」

もしかして何か俺悪い事した？

と、軽く自己嫌悪プラス來桜の心配により俺の脳がオーバーヒートしそうになる直前、來桜がやっと口を開いてくれた。

「… どうも、しない… ただ、今日は… 気分が、良くない、だけ」

そう、絞り出す様に話す來桜の姿に、何故か俺は共感した。

「… 何で、だ…？」

「……だから、帰る」

「えつ？」

來桜は椅子からスッと音も無く立ち上がると、数秒もしない内に帰つてしまつた。

「…………何なんだ？ 一体……」

それに、この似た様な感情は……

「……來桜……」

その日俺は來桜が帰つた後、余りにも來桜の事が気になつた為上手く動かない体で先生の部屋に向かつた。

「つて事なんだが、何か思い当たる事あるか？」

「ん~、そりやあねえ……」

「はつきつ言えよ、萌。」

「ちとら動かねえ体無理矢理動かして来てんだ。」

「…分かつた。といふか呼び捨てかコラア。」

「どうでも良こじやん萌えー」

「滅べー。」

「あふつーー?」

先生改め、萌が投げた殺人級の速度を持つた枕が顔面に直撃した。か一瞬死んだ両親見えたよ…

「とにかく話を進めるぞー。」

「あんたが止めたんじゃないのか。」

それと俺の息の根も止まつそつだつたよ。

「そんな事はどうでも良いー今問題なのは来桜の事じゃないのか!?

そうだとナビき、俺の命はいつでも良こは無しこぞ…

「…つたく…話を戻すぞ。…来桜に兄がこるといつ事は知つてゐるな?」

「ああ。」

「じゃあ、その兄が一年前に亡くなつてゐるといつ事を知つてゐるか?」

「え……？」

……一年前……？

「何でも、生まれた時から心臓が弱かつたらしくてな。」

じゃあ、俺があの時、

「一年前に軽い病気になつて逝つちまつたらし……。」

言つた言葉は、傷口に塗をかけたようなもんじやないか……

「ホント呆氣なく死んだらし……。」

俺は何て事を……

「……その中でも、來桜は一番悲しんだそつだ。昔から兄にベツタリ  
だつたらじいからな……。」

「……明日來桜に謝りひ。」

許してくれるとほ限らんがな……

俺が椅子から立ち上がり、ドアに向かおうと足を動かそうした瞬間、萌が馬鹿にするよつて口を開いた。

「謝んなよ馬鹿野郎? こへら來桜の悲しみが分かっているからって  
よお……それはダメだろひ。」

じゃあ、どうじゆつてんだよ……

「じゅあ、じゅ…」

「馬鹿が…！」

「…？」

ガアン…！

言葉を途中で遮られただけじゃなくて、何か硬い物が後頭部に直撃した。

「いつ…てええええええ…！…！…？」

当然俺は、その痛みに大絶叫し、床をのたうり回った。

「何だコレ…？一体何投げやがった萌ええ…！…？」「

「…アホか、タダの枕だ。」

枕だと…？あの夜のお供の柔らかいアレか…！…？

「どんだけ力込めて投げてんだコラア…！…！」

「…ふん、これで頭は冷めたか？」

先生はやれやれといった様子で溜息を一つつく。

「…お前も肉親が無くす悲しみを知っているんだろう？」

「……ああ。」

「だったら、今かけてやるのは慰めの言葉なんかじゃあ無いだろう？」

？」

… そうだな。忘れていた、あの時の俺が一番欲しかった言葉は：

「分かつたらわざと出でていな。」

「え？」

「俺は眠たいんだ。男はとつとと出でていけ。特にお前は、寝顔フェチというじやないか。もしお前が獣と化したら、俺が一番危ねえだろうが。」

「えへへへへ？」

「えへが長い、せつせと部屋に戻れ！」この変態があーー。」

言ひて萌は枕に手をかける。

「てか何個あるんだ枕！？」

「つべこべ言わずに出ていけーー！」

「オーンー

「ふがーーー？」

枕を顔面にまともに食らい、俺の意識は途切れた。

だつてあなたもんまともに食ひりつゝ無事じやすまないだろ？

ちなみに、俺が田を覚ましたのはそれから一時間後だった。

不幸その十八 彼女は結構優しいです。（後書き）

今回の出来はどうでしたか？

久しぶりに更新したので書き方が若干変わってしまっていると思  
いますが、楽しんでくれたのなら嬉しいです。

不幸その十九 彼女はアレで頭が良いやつです。（前書き）

ども、お久し振りです！

最近ここに戻ってきたばかりのレイン氷花です！

いやー、本当に長い間お待たせしてすいませんでした。

でも、これからはこの小説が完結するまで頑張ります！

ちなみに、更新スピードは週に一回か二回です。

## 不幸その十九 彼女はアレで頭が良いやつや。

ども、こんばんわ。最近寝顔フニチといつ事を自覚した麗一です。

「…ふあ～…」

ちなみに今は十一時、良い子は多分寝ている時間帯だ。

「…眠。」

何故こんな時間まで起きているかって？

お答えしましょ～

只単にロメアにびつぶつ迷つてこるだけです。はー。

「田俺はロメアに会つてない。」

そして、ロメアに毎日会つと約束しておいて会っていないから会つ  
ずらー。といつ事で今俺は歎きでこる。

「うへん…」

「はやつぱつ素直に謝つといった方が良いか？」

「…」

…とか、この思考つて意味無くね？

「…早く行こ。」

思考を中断し、軽く自己嫌悪に苛まれながらも俺はポケットから指輪を取り出し、人差し指に嵌める。

「おひひれ～」

「キーン！」

「ぐげつーー？」

着いた瞬間、背後から何かが首に物凄い勢いで突撃してきた。そのせいで首が嫌な音をたてた。…マジで痛い。

「もーーー一日も来ないから心配したじゃないのー！」

「ハハハハ…」

「ぐ…ー！」

痛い痛い！抱き締める力強過ぎるから…！

＝＝＝＝シメキ＝＝＝

「が……あ……」

てか強くなつてる……わつときよつ強くなつてるから……」のままだと色んな物出すから……

「やめ…………！」

何とかこれだけは言えた！でもロメアは力を抜く氣配が無いんですけどが！？

「……死……ぬ！」

くそつ……こいつなつたらアレ使うしかないか！

「…………」

ミシ。

止まつた……あんまり口レハは使いたくねえんだけど、仕方ねえわな。

「よつと、」

ビクンと体が跳ねて、ロメアはその場に座り込んだ。

「ふう、頼むから力を加減しろ、危うく内臓的な物が出そうになつたぞ？」

「『めんなさい……麗』が来た嬉しさで我を失つてた……」

「別にいい、それにせこまで喜んでくれたらうれしだって嬉しいからな。」

ロメアの頭にポンと手を置き、優しく撫でる。

「ありがと」

ロメアは満面の笑みで見上げ、俺の撫でている手に自分の手を乗せる。

「さて、こつまでも地面に座つてたらいけないし、早くベッドに行くぞ。」

ちなみに今の発言に嫌らしげな持ちは無い。…………多分。

「うん、分かった。」

「よつと。」

ロメアの体を引っ張り、支えてあげる。

はたから見れば抱き合つているよつと見える。まあ、実際抱き合つているんだがな。

「歩くぞ。」

「うん。」

名残惜しいが、俺は抱き締めていた腕をざかして、少し薄暗いベ

ツドの方へと向かう。

だつて離れないと、俺の愚息がロメアの体に反応して臨戦体勢に入つてしまつ。それだけは避けなければ。

「ねえ、どうして一日も来なかつたの？私寂しくて自【自主規制】しつばなしだつたよ？」

ハハ…何言つてんだコイツは。危うく俺の愚息が反応しかけたじやねえか。

「冗談はさておき、すまなかつた。俺ちょっと怪我して入院したんだよ。」

「えつ！？入院！？どこが怪我したの！？」

「うわっ！？ちよつと触つてやがる！？」

「きなり抱きついてくんないで言いたいけど何か柔らかいから許す。じゃなくてえ！」

「大丈夫だからー頼むから一回離れろー！」

すると素直にロメアは俺から離れて、俺の顔を見上げる。

「全く、俺が怪我したのは左腕だけだ。だからそんなに心配すんなつて、な？」

そう言い聞かして、ロメアの頭を撫でる。

「それと、一日も来れなくてごめんな。これからは毎日来るよつて  
するからせ 元気出せ」

「ありがとう。やつぱり麗一は優しいね」

そう言つて、ロメアは太陽のように笑つた。

「そんな事ない。女に手をあげる奴が優しい訳あるか。」

その眩しい位の笑顔から俺は目を逸らして、照れ隠しに自分の悪い所をあげる。

「うん、麗一がするのは皆に對しての信頼の証だよ。」

と、ロメアはそれを否定して真直ぐ麗一の目を見る。

「不器用だけどみんなに優しい…そんな麗一が好きだよ」

「えあ、ちょっと…今の流れで言わると一撃なんですか…？」

突然好きと言われ、かなり気が動転してあんま意味が分からぬ事を口走る。

「無自覚でこれ程の威力とは…」

「てそれよりも聞きたい事があつたんだ！」

無理矢理話を変える。「うん、苦しい。」

「何故メアが学校に入学したんだ！？」とか入学出来たのかアレで…。  
？」

「何故って…だってメアが学校に行きたいたって言ひか…」

「だからって、アレで入学出来んのか？」

普通に考えて、アレは論外だと想つたが？

「やつぱり麗一もやつよな？」

やつぱりって？

「アレでいて結構頭良いんだよ？…馬鹿だけど。」

嘘だ。

「あつー今嘘だつて思つたでしょーーー？」

そうですけど何か？

「信じられないのは分かるけど、本当の事なんだよ？…

「マジですか。」

「マジです。」

「マジでか。

「マジでや。」

「マジでか。」

「マジでや。」

「ま、ま、それほどもかべ。」  
「ま、ま、それほどもかべ。」

た

.....

「.....遙が遙だった。」

「えー?何がー?とこうかで向へー?」

「あ、それは置ことこいつと...」

「置ことへー?...」

「かうかうへんてぬこかー?」

「えつ?」

「.....

「あー?」

「…………」

「寝るの早ー。」

「…………」

沈黙。

「もう、世話のかかる夫ね……」

麗一の頭を優しく撫でる。

「でも、そこが好きだよ、麗一。」

もし、あなたがこの試練をクリア出来たなら……

「私は、あなたに全てを捧げます。」

たとえ、魂であっても……

?『後少しだ…後少しで魔王の座は俺の物だあ…！…』



サセルカ。

不幸その十九 彼女はアレで頭が良いやつです。（後書き）

ども、読み終わっての感想はどうですか？

不満または感想があればいつでも聞きますー。

それでは皆わんー次の更新までさらばー！

ちなみに、モバゲの作者レイン焰花は私と同一人物です  
機会があればそちらも読んで見て下さい。

それではーまたお会いしましょー！

不幸やの | 十 彼女にはむかと男に警戒して欲しいです。 (前書き)

更新が毎回遅れてすみませんでした。

でもそろそろ更新がスムーズにできたりです。

では、今回のをどう

不幸その一十 彼女にはもっと男に警戒して欲しいです。

起キロ…

誰だ?

起キロ、ソシテ敵ヲ殺セ。

敵? 敵つて誰だ?

決マツテイル。オ前以外ノ、魔王ノ座ヲ狙ウ者ダ。

おい! お前一体何?

奪ワレルナ、魔王ヲ誰ニモ渡スナ。アノ女ハ、俺達ノ物ダ。俺達

以外ノ誰ノ物デハナイ！

「なつー？」

ガバツーゴキンー

勢い良く体を起こす。そのせいで骨がなつた。微妙に痛い。

「イッテヨーー！」

腰を片手で抑え、もう一方の手は額の汗を拭う。

「……なんだあの夢は……？」

いや、そもそも夢なのか？アレは何か夢とはまた違う何か……だと  
思つんだが……

「何かが引っ掛かる。何か大切な事のよつな……」

と考え事をしている内に、頭が冴えてきて現状について頭がいく。

「…………」

なんだ、これは……？

「…………ん……」

とロメアは横で硬直している俺の状態をよそに気持ち良さそうに

寝返りをしつつ。

「…………」

田を離さうとしている離せない。そんな光景が今、田の前にある。

「…………」

ツー…

鼻から何か暑い液体が流れる。

そして久々に登場した息子が臨戦体勢に

「だあーー..わせるかあーー！」

やつと我に帰った俺は紅い指輪を慌てて指から抜いた。

…………

「キンー

「あべしつーー？」

戻つて来たと思った瞬間、俺は背中に物凄い衝撃と痛みを感じた。  
〔冗談抜きで痛いんですけどーー？〕

「イテテ… 一体何で俺は痛い田に………… 何つづりづタな展開だよ

「」の野郎。」

ベッドから落ちるつて、稀だぞ？天然記念物だぞ？… わすがにそ  
「までじゃないか。

「まあ、兎にも角にも…今は」の変な空氣をどうにかしないとな…

いつもと変わらない病室…だが何か変だ。何か空氣とこうかそれ  
ゆう物が乱れている気がする…

「よこしゅつヒー。」

勢い良く立ち上がり、病室のドアに歩いていく。

幸か不幸か、この乱れの中心が分かる。これなら迷わずこすむな…

「とこりか、俺はそこに行ってどうあるつもつなんだ？」

ヘルみたいな奴がいるかもしれんのに…

「ま、だからといつてこの乱れを治さない訳にもいかないしな。  
ま、治し方も分からねえが、行きやあ分かるだろ。」

立ち止まって、顔を上げると既に田の前には屋上への扉が見えた。

「ま、どんな奴が来ても必ず勝つてやる。」

バタン。

扉を勢い良く開け、屋上へと足を踏み入れる。

「…やつぱり、ここから乱れが生じているな…」

だつたら一体、何が原因なんだ？

「よお？案外早くここに来れたな…さすが、次期魔王候補ってか？」  
な…！

「どこだ！」

「ここだ！」

ヒュン…と風をきる音が頭上からし、咄嗟に横に跳んだ。

ズガガガガガガガガ…！！！

と、同時に何かが大量に突き刺さる音がした。

「…な…嘘だろ？」

じ、地面に鉄骨が刺さつとる…！？しかもあり得ねえ程…！！！

「あ…あ、折角楽に死ねるチャンスだったのにな…」

そいつは、漆黒の髪を靡かせてそんなイカれた事を笑顔で言った。

「俺の名前はフルウ・レイン……一応悪魔で貴族だ。何故こんな事をするか？については……言わなくても分かるよな？」

「タリと、顔を歪ませてそいつは笑う。

「そうだな、なら、俺も本気出して抵抗しても良いんだな？」

「お前、人間のくせに中々良い度胸じゃねえか。気に入った。お前は特別に喰い殺してやる。」

「遠慮すつぜ、テメエはそこの鉄骨でもかじつとおけ。」

「言つと同時に俺はフルウといつ悪魔に向かつて走り出す。

「ほつ！こきなり突っ込んで来るか、益々氣に入つた！」

「食らえ！」

フルウの懷に入ると、渾身の右ストレートを腹に決めた。

かのように見えた。

「なつ！？」

「弱いぜえ！！？」

アーノンシ

「がはあつ！？」

動搖していた俺は、フルウの右脚による物凄い蹴りをモロに腹に食らってしまった。

ドンシ！！！

「がつ！」

そして、俺はそのままコンクリートの壁に背中を強打した。

ヤベニ　いきなりヒンチじやねえか　！

- < N D . . . -

「ケケケ、どうした？もう降参かあ！？」

嘲るような笑みと共に、フルカは右手を鳴らしている。

畜生が

くそ、やべえなこりやあ…死にそうだ。ここでコレは使いたくなかったんだが…なんせ、まだ上手く使いこなせねえからな。

「ククク、どした？もう諦めたのか？見たところ、悪魔に対抗する策を持たない人間みたいだからなあ！！」

フルウの勝利の雄叫びにも似た高笑いが響く。

「さあて、そろそろ死んでもらおうか？無力な人間……」

バキイ！……

コンクリートを粉碎する一撃が、貫いた。

「グガアアツ！……？」

ベキベボキキボキミシミイ！……！

内臓のあちこちが潰れる音に混じり、骨の悲鳴が聞こえる。

「があ……！……て、めええエエエエ！……！」

「……」

「どうしてだ！？何故人間であるお前にこんな力が使える！？

「使えるさ、悪魔。人間は、お前が思っているよりも全然強いんだよ。」

「俺、五膳麗一は悪魔であるフルウに致命傷を与えた。それを証明した。

「……く、クク、クククハハハハハハハハ！……！」

「何がおかしい？」

「いや、ただお前の事がもつと好きになつてね?」

「男からの求愛はお断りしています。」

だつてそういう趣味がないんだもの。

「違う違う。そういう好きじゃない。ただ俺はお前といつ存在に求める物を見つけた。と言いたい訳だ。」

「ふうん、そつ。…あんまし理解出来ねえ…」

「別に理解しなくてもいい。ただ、俺はお前を強いと認め、殺すのはやめるわけだ。」

「へえ、往生際が良いみたいだな。」

「だな。そろそろ俺は帰るとあるよ。」

「帰れ帰れ。お前のせいで入院が長引こりやつたんだからな。」

「…ふむ、お前入院してんのか?」

「そうだが?」

「ドンマイ。」

「ふやけるなあ…!..」

何だとこの原因がああ…!..

「ククク、お前はやつぱり良い。褒美だ。怪我は全て治してやる。」

「えー？」

「我が友の為、我が血肉を削りて、我が友に生命の源を授けん。」

「な、何を！？」

「紅き血の祝福」

ジワア…

「なー？」

フルウが何かを唱えた瞬間、俺の体から何かが浸透するような感覚に襲われた。

「何だこれー？どつたのこれー？何したんのコレーーー？」

かなり恐いんですけどーー？

「ただの回復系の魔法だ。暫くすると俺は完治するだろ。」

「そ、そつなのか？」

「俺は帰る。お前はこれからも死に物狂いで生きや。それが俺を倒した男の生き方だ。」

「お、おう。」

てかちゅっと待て？アイツ内臓やら何やら碎きまくったはずだが？

「じゃあな、隻眼の魔王よ。」

「……」

「……いつ、気付いて！？」

「じゃあな…ククク…」

スウー……

別れを告げると、フルウの体が砂のように崩れて消えていってしまった。

「あいつ……………何気に親切だな。」

「……………？」

「……………誰だ！？」

「私だ！……………」

いや…そんな堂々と言わないでくれないか？萌ちゃん。

「萌…いつから見てた？」

「……………何とか誤魔化さなければ！？」

「お前がここに入る前から。」

「……………それってストーカーだよ萌ちゃん。」

「うるせー。単位1にさつぞ。」

それ職権乱用じゃね？

「とにかく、全て包み隠さず話せ。でなければ退学にすりゃ。」

「それって職権乱

「話すよな?」…………はー。」

……ぢづきょ、俺……（涙）

不幸やの | 十 彼女にはむかと男に警戒して欲しいです。（後書き）

今回の出来はどうでしたか？ダメだしなどがあれば是非してください。

それでは、またの機会にお会いしましょう

不幸その一十一 彼女達は頼れる繋がりです。 (前書き)

更新不定期すみません…

## 不幸その一十一 彼女達は頼れる繋がりです。

ども、こんにちわ～。前回派手に暴れ過ぎた為か萌ちゃんに全てバレてしまつた麗一です

「誰が萌ちゃんだ、誰が！」

「細かい事は気にしないでね～え～。」

「ぶつべ。」

「すいません。」

瞬時に頭を下げる。

「まあそんな事はどうだつていい。それよりもお前の話が信じられんぞ？」

「なら忘れてくれ。」

「出来るか、あんなもんまともに見ちまつたんだ。信じじるしかないだろう。」「ですよね～。」

「だがお前が次期魔王だといつのが一番信じられないのだがな。」

「あ？」

「じつこいつ意味だ萌ちゃん?」

「やつこいつ意味だ。」

「だからじつ意味だ。」

「そういう意味だ。」

「だからじつ意味だって聞いてんだよ萌ちゃん?」

一撃必殺スマイルで萌に尋問するよ!つい聞ぐ。

「…お前何が恐くなつてねえか!…?」

「何の事かい?」

「ハハハ…

「ハヤイイイイイイ…?」

ズザザザザザザザザザザザ…!…!

物凄い速さで後ずさる萌。

勿論顔は恐怖に引きつたままで。

「お、おーーーこれ以上近付くなよーーー?」

そんなに怯えないでよ……軽く傷つぐ。

「はあ……まあいいや。」

顔を必殺スマイルから切り替えて溜息を一つつく。

「問題はこれからだついてだしなあ。」

冗談抜きで面倒だ。

「どういう意味だ？」

復活した萌ちゃんが怪訝そうな顔で聞いてくる。

「だつてさあ、またフルウみたいな奴が来たらどうするよ?かなりヤバいじゃん?」

「まあ、そうだが。」

「あら、アーリーさん！」

「なあ、もう一つ問題があるぞ？」

ああ？ 何？」

なんだよ、これ以上厄介事を増やさないでくれよ。頼むから

來様も備と一緒は見てたんだが……」

え？」

マジですか？

「来桜、入つて来い！」

と萌ちゃんはドアに向かって叫ぶ。

ガー……ガタン

そして現れたのは、制服姿の来桜。

「…

「…

「…

…沈黙の再来。

「じゃなくて！…来桜もいたんなら始めから出てこれば良かつただらうが！」

「…昨日」

「…そうだったな。そりゃあ会はずらいよな。」

「…」

「…」

「…」

ペロシヒ田を出しつて向嶽やアピールして語つてみる。

「やでした。」

「お前だー。」

「誰のせいだー!?」

「話が進まんな。」

てか來桜さん? やっぱり無言ですか…

「…」

「誰が萌ちゃんだあー!ー?」

「黙つてくれ萌ちゃん。」

「…」

「何いつてんだお前?」

「させらかあー!ー!」

そしてまた沈も

「…」

「…」

「 「 ..... 」 」

.....

「 ま、 まあ ー 元気出せよーなー? 」

「 いいよいによ、 僕には可愛がなんて無理な話だつたんだ。 」

ポン...

部屋の隅で体育座りをして床にのの字を書く俺の肩に、 ポンと手  
が置かれる。

「 ... 大丈夫 ... 一部の人は萌える ... 」

「 「 ..... 」 」

..... 喜んで良いのか?

「 ... ありがと。 」

さて、 話を戻そつ。

「 まあ、 僕が次期魔王候補といつ事は分かつてゐるよな? そのせいで  
狙われているのも? 」

「 ああ、 大体はな。 」

「 ... 知つてる 」

「てか信じるの?」

「 「 「 見たから ( ...) 」 」

二人揃つてのお返事ありがとう

そしてこれからどうなるんだろうか…

「とまあ、無駄な思考はここまでにしておこう」

少し深呼吸をし、息を整える。

「知ったんなら、この事は誰にも言わないでほしい。」

「それは当然だろ? が?」

「…当然」

「うん、一つは〇〇だな… よし、次は。

「…俺に近付かないでほしい。」

「え?」

「…」

驚きが隠せない。といつ顔をする一人。

まあ当然か。

「俺はいろんな奴に命を狙われている。これは間違ない。だから…」

「だからなんだ。」

萌ちゃんの怒気を含んだ声が遮る。

「だからなんだ。って…」

「俺はそんな理由でその願いを聞き入れたくない。」

「そんな理由つて…」

「UJの気持ちは來桜も一緒に筈だ。」

「…一緒

「萌ちゃん…來桜…」

「だからさ、俺達に迷惑かけるとか、そんな理由で繫がりを断ち切るもんじゃない。」

…繫がり、か…

「それに、繫がりは簡単に断ち切る事も出来ないしな…」

確かに、そう簡単に断ち切る事も、切られる事も無い。

「萌ちゃん、なんか先生みたいに良い事を言った…」

「ゴン……」

「だつ……？」

何故か萌ちゃんのゲンコツが俺の頭にクリーンヒット。痛え……

「俺はこれでも教師だよ、この野郎。」

「わでした。」

「うふ。マジで今思って出したました。」

「あー、こて……」

絶対タンゴブ出来たよこの痛みは。

「……でもまあ、アレだ。萌ちゃんと來桜の話は理解した。うん。悪かった。自分一人で抱え込んで結論出して……」

「分かっちゃあ良一んだよ。」

「おかげで決心が出来た。」

「ほう?…どんな決心がだ?..」

聞いて驚くなよ萌ちゃん?..

「それは……」

「それは……？」

「……？」

萌ちゃんと來桜の意識が集中するのを感じる。

よし、『言つてやるー！』

「明日考える。」

「……」

「……」

「……」

「ゴンーー！」

「いだつーー？」

「ドカツー！」

「げはあつーーー？」

「ドガツー！」

「いだつーーーちよつーー？無表情で殴らないでくれないかーー！」

「うっせえ、散々人に期待をしといてなんだあ？明日考えるだと？」

ふざけるのも大概にしちゃ。」

そう言いつながらも無表情で拳を振り上げる萌ちゃん。

「だからっ、俺はこんな大事な事を短時間で決めたくないだけだつてばーーー？」

ピト…

突然萌ちゃんの攻撃が止む。

「…はあ、そういう考えなりと先に言えば良かつただろ？が。それをわざわざ誤解されるような言い方をしゃがつて、この馬鹿が。」

「

「…あー、すまんね。」

「ふん、今日のといひは早めに帰るが、來桜。ここにいけやんと考えさせてやらんといけんしな。」

「…分かつた」

「一…

「じゃあな麗二。明日までにこな考えておかないと殴るからな。」

齧しかよ。

「…バイバイ」

「うん、來桜は普通だな。

「明日こなれるで、だから一人とも、明日も来てくれな。」

「当たり前だ。」

「……当然」

「はは……じゃあな~。」

「……同じ病院内なんだけどな。」

「…」

「…」

萌ちやん達が出ていってから、少し経つて静かに扉がしました。

さて……そろそろ良いかな。

「グ……！」

チツ、さつきよつ頭痛が酷くなつてやがる。

萌ちやん達と話始めてから、頭痛がして、そして今は頭が割れんばかりの痛みを発しやがる。

「ギキイ…

「グアアー！？」

真実ヲ、見セテヤル。

また、あの…声が、聞こ、え…

そして、俺の意識は闇に墜ちた。

## 不幸その一十一 彼女は久しぶりに会つてもガラスのハート。（前書き）

ども、お久しぶりです。レイン氷花です。

何となく最近、キャラの人気が知りたくなりました。

ですから、キャラの人気投票をする事にしました！

期間は今日から1ヶ月の半ばまで。

投票の仕方は簡単！キャラの名前（だけでも良い）を書くだけ！  
因みに一人だけ。

それと感想の方で出して下さい。

沢山の票をお待ちしております！

以上！

不幸その一 十一 彼女は久しぶりに会つてもガラスのハート。

「オイ、起キロ。」

聞き慣れた声が上からする。

「オイ、意識ハ既ニ戻ツテイルダロウガ。」

誰だろ？…？聞き慣れた声で、いつも傍で聞いている筈の声なのに、誰か分からぬ…

「チツ、奥ノ手ヲ使ウカ…」

ん？何か嫌な予感が…

「机ノ、一番目ノヒキダシに入ツテイル、バイb

「ダ――――――――――？」

何を言おうとしてやがる！？

慌てて声を遮り、一瞬で起き上がる。

「ヤツト起キタカ。」

上から声がまた聞こえる。

そして俺は慌てて上を向き、驚愕した。

「な…」

「ククク…ナンダ、ソノ化ケ物デモ見ルヨウナ目ハ？」

声の主、そいつはその見慣れた口の端を歪めて笑う。

「アア、ソウ言エバ、コウシテ会ウノハ初メテダッタナ…」

「お、お前は…！？」

「…俺ハ、十二ノ王ノ一人ニシテ、幻ヲ統ベル王、五膳麗一。」

と、そいつは、五膳麗一…といつ人間の形をしたそいつは、俺が知  
らない事をペラペラと喋った。

「何を言つて…！？」

「オ前ハ、誰ダ？」

「はあ！？俺は五膳麗一だ！？お前と同じ…名、前…？」

俺ノ名前ハ、これか？

アレ？待て…なんだ…！？

「気付イタカ？違和感ノ正体、矛盾…。」

「待て、待て待て待て待て…！何で！？」

どうして俺は、自分の名前を疑問に思った？

「才前ハ、ソノ疑問ノ答ヲ知ル事ハ出来ナイ。」

どうして俺は、こいつが正しいと思った？

「何故ナラ、才前ハ所詮偽物ダカラダ。」

「どういう…」

「ソノママノ意味ダ。」

「意味が分からぬ…」

「イズレ分カル。」

ピシッ！

あいつの体にビビリが…！？

「フム、ソロソロ時間力…」

「時間？」

「ジャアナ、偽リノ器。」

「おい待て！お前にはまだ聞きたい事が…」

ビシイツー！

必死に止めようとするが、ヒビはだんだんと広がり続け、やがて視界がそのヒビに覆われて闇が広がった。

「なんなんだよ、一体どうなつてやがるってんだよ……答える……自称五膳麗ー！……！」

闇に覆われた空間に、俺の声だけが空しく響く。

「……知リタケレバ、進メ、タダタダ進メ。何故ナラ、ソノ先ー在ル死ニヨツテシカ、オ前ノ答ハ見ツカラナイカラダ。

そいつの声が、今度は俺の頭に直接聞こえる。

「……次、マタ俺ニオ前ガ会エルノハ、オ前ガ消滅スル瞬間ダト覚エテオクンダナ……」

ブツン……

頭の中で、何かが焼き切れたような気がした。

シャリ、シャリ…

「田覚えましたか？」

「…？」

体を起こし、横を見るといんクの髪があった。

「もしかして、暫く会ってなかつたから、私の事忘れたとか言わな  
いですよね？」

「あんた誰？」

「…ひつ、ぐう…ひつ…」

「『メン』『メン』 しつかり覚えてるで、メア。」

久々に頭を撫でてみる。なんか懐かしい。

「…ぐすり…酷いです。」

「はは…久しぶりだから、ついイジメたくなつちまつてな。」

「ハハ…麗|はひです。サテイストです。鬼畜です。」

「はは…」

相性はしない。何故なら、自覚しているから。

「でも魔王はミドです。ドミです。雌豚です。相性抜群です。」

あー、やっぱつらうか。そつなのか。でもメアリ、ニコロのは違  
「ハヒとドミ。ハヒから導かれる答えは、ハヒ・首輪フレハブツ…?」

ハヒから先を語つ事を、脳天チラシップを食らわす事にて阻止。

「まあかの調教。ふふ…?」

「やめ…」

…したこな…。

「変態。」

「ハヒ…また口元出してたか俺…?」

「顔に出でました。」

「ハヒ…」

なんてこひたい。

「まあいいです。魔王様も似たよつなものですから。」

そうなのか！？

「とこつか麗一よつ上です。」

…ロメアよ、お前は一体何にたどり着いつとしてこる。

「と、そんな事よつ麗一。」

「ん？」

「リンゴ剥いたから、食べて。」

「ロジと天使のような笑顔でメアは言つと、爪楊枝に刺したリンゴを俺の顔の近くまで持つてくる。

「ああ、ありがと。」

と俺はメアの手から爪楊枝を取るひとするが、俺の手は空を切つた。

「へ？」

「ひつかみつ場合普通、女子に食べさせてもひつのがすじつとも  
んでしょう」

なんだそれは。初耳だぞ。

「はい、アーン」

「一人で食えるから良いって。」

それに恥ずかしいし。

「うう…」

「分かりました。全力で食べさせてもらいます。」

卑怯だ。涙卑怯だこんちくしょー。

「はい アーン」

「アーン。」

相変わらず切り替わるの早えー。

「ん。」

モグモグ

「あ、そう言えば…」

「なんだ?」

「魔王様が大切なお話があるから、すぐ来るよつ」。だつて。  
「え…アイツが、ね?」

「へえ…アイツが、ね?」

何を企んでるんだ?

「まあ、いつか。とりあえず、今行きやあ良いんだろ?」

「はいです

花瓶の横に置いてある紅い指輪を手にて取る。

「んじゃ、行って来る。」

「いってらっしゃい

そして、紅い指輪を指で止めた。

不幸その一十一 彼女は久しぶりに会つてもガラスのハート。（後書き）

また読んでくれてうれしいです

不幸やの | 十三 彼女のために生きたこと思いました。 (前書き)

ども、お久しぶりです！

最近腰がいたい十代の作者レイン氷花です！

いつもいつも更新が遅くてすみません！

と唐突に改めて謝つてみました。

では本文へ

不幸やの | 十三 彼女のために生をたこと思いました。

「ふう……

…………

見慣れた寝室につき、いつも何か言ってくるロメアがいないのに  
気付き、辺りを見回す。

「……お~い、ローメアー……？」

「……！」ただよ、麗一。

こつもよつかなり低いトーンのロメアの声が、すぐ後ろから聞こ  
える。

「あ？」

「行」。ベッドに。

「ああ。」

何回も壁つが嫌りしこ意味は無い。ベッドに座るだけだから。

トスン……

何、この沈黙？

「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」  
「…」

イラツ

7

「おい、何か喋ってくれ。」

隣りに座つてんのこどもが、どうもなく距離を感じるのは俺だけ？

卷之三

-  
h?  
L

「はい、あの世界が好き」

卷之三

傷しい奴がいて  
先生がいて  
方違がいる世界の事

アラタノミツタケ

」  
そ  
が

「なんだまた…そんな事を聞くんだ？」

口メアの顔にかかる影が濃くなる。

「魔王になるためにはね、住んでいた世界、人である生活を捨てなければならないから…」

「な…」

「うなのか！？」

「それに、五膳麗一」という『人間』をこの世から消し、『悪魔』の、『魔王』五膳麗一になる事も、魔王となる為には必要な事。…言い換えれば、絶対に避けられない道。」

「…なんでそんな事を黙つてた？」

「ゆづかこの世から消すつて…まさか一度死なんといけんのか？」

「…」

「…まさか、俺がそんな理由で逃げるとでも？」

「……」

「あ…俺はそんなヘタレに見られてたのか…何かショック。

「…まあ…」

「…」

「また沈黙か？沈黙なのか？沈黙に入らなければならぬのか？」

「…そんなのさせぬかああ…！…！」

「…?れつ、麗一…?」

「あ……こや、いひの話。」

またやつおめつた…

「えー……と…」

「まめ…」

あー、ロメアがちよつとひこころむつながらかる。だが今はそんなのせ置いておけ。立ち直れなくなるから。

「…まあ、その、なんだ?」

「うそ…」

「…とりあえず、心は変わらないから。」

「え…?」

「心は変わらない。例えどんな困難、問題にぶつかったとしても、変わらないから。」

(僕は一生ロメアちゃんを好きでいる…)

「なんだ…」の、声は…?

(たとえどんな不幸に襲われても、僕の気持ちは変わらない…)

「誰だよ…」の、声は…?

(約束だよ、ザーフィザーフ。セロメトロが忘れても、僕は絶対覚えてるから。)

なんだ……この、『記憶を…頭ん中を焼き切るような声は…』

何故いつも鮮明に聞こえやがる！…？

「麗」「…」

ロメアの心配わづな声が聞こえる。

「……………いや、すまん。ちよつと仮分が悪かっただけだ。」

声が、止んだ…

「なり良いんだだけ…」

安堵したよひに弱く笑みを浮かべる。

「…なんか、話がつやむやになつたな。」

「誰のせい？」

「俺つすね。」

任意でやつたわけではないんだがな。

「はあ…」

唐突に、ロメアは溜息をついて呆れたよつて俺を見る。

「何かもつ、麗一に隠し事するのもバカバカしくなったな。」

「…なんでだ？」

「それは、ねつー。」

「…」

「かはつー。」

突然、ロメアにベッドに押し倒される。

ていうか腹に頭突きをしないでくれ。普通に痛いから。

「それはね…」

ロメアが俺の上に乗り、四つん這いになつて上から見下ろす。

「麗一の心が、想いが強過ぎるからだよ。」

ロメアの顔がだんたん迫つてくる。

「どんなに不幸になつても変わらない気持ち、どんな困難にも立ち向かえる気持ち、どれだけの危険をおかしてでも貫く気持ち…」

とつとつロメアの唇が俺のに触れ、そしてすぐに離れる。

「それが、隠し事をしている私が、ようじつやつ弱く卑怯に感じる。」

「

「『…』と優しく微笑むと、また唇を触れさせた。

キス魔か？

「麗一は気持ちを全て出し切っているのに、私はまだどこで怯えて自分を抑えている。」

そしてまた唇を落とし、また離す。

「そんなのは嫌だ。こんな関係なんて嫌だ。」

そしてまた唇を口わしそうに離れる。

「私も、魔王とかそんなの無しにして…」

また唇が触れる。だが今度はすぐに離れず、触れたままのキスが数秒続いた。

「一人の女の子として、麗一といたい。笑いたい。本当に幸せになりたい。」

「ロメア…」

「…でもね、無理なんだ。」

「え? どうした？」

「魔王とは、その如の通り、魔を統べる王。」

「それがどうしたんだ？」

「魔王といえど、王には変わりない。そして王とは、何時いかなる時も、王として在りなければならぬ。」

「…」

「だから…王として、これ以上は黙日なんだ。」

王として…か。

「…じゃあ、お前が王じゃなくなれば良いんだな？」

「えつ？」

「つまりだ。俺が魔王になれば、お前は女の子として接する事が出来んんだろう？」

「…まあ、一応は…」

「よし、じゃあそれで。」

「え？・え？」

「約束だ。破つたら覚悟ひとつナよ。」

「無理矢理…？」

「反論は認めん。」

「酷…！？」

「で、話は終わりか？」

「勝手に話を進めないでーー!？」

「ふむ、ロメアで遊ぶのは飽きたからやめるか。」

「止めないでーー!」

…アマ全開だな。

「… もひ、話は終わりか？」

『気をとつなおじて、真剣に聞いてみる。

「ひひん、まだあるよ。」

「何にしつこいだ?」

「私達の婚礼の儀式について、だよ。」

婚礼の儀式……婚礼、つまり結婚、熱愛、合体、子産……

「…卑あざね?」

「何が?歳の事なら気にしなくていいこと。いつの世界じゃ、5才から結婚出来るもの。」

「へー。」

つまり、聖めばすぐGOAL LINE出来る訳だ。

「それで、どうがうづか？」

「ふむ。」

…早めにしたほうが良いか…でも、まだ人間としての生活に未練があるのも確かだしな。

「一ヶ月後くらいが良いんじゃねえか？」

最低だな、俺。

「…一ヶ月後、か…」

む～、と少し考えて、ロメアがおもむろに唇を落としてキスをする。

「ん…じゃ、決まりね」

そして唇を離し、満面の笑顔でロメアは言った。  
「準備は全て私のほうでやるからね。」

「おひ、ありがとな。」

「じゃあ、お別れの前に一度、ちゃんとキスを…」

「ん…」

また、ロメアと唇を合わせる。だが今度はロメアも俺も、お互に抱き締めあいながら。

「ん……っ……」

合わせた唇の間から、漏れた声を隠すよつて、お互いの唇を擦ぎあひ。

「…」「…」

出来たらこいな

こつまでもロメアと一緒に、こんなふうに話して、こんなふうにキスをして。

ぐ。

だか、

俺は生き残りたいかった。

強く、強く、強く

不幸その一十三 彼女のために生きたいと思いました。（後書き）

最後に、人気投票についてなんですが、期間を伸ばす事にしました。

何故なら、全く票が無かつたのですから…（・・・）

とまあ湿つぽいのゴミ箱に捨てるとして、早速期限について  
言ひやがります

期間は第四十話まで、とかなり長い時間をとります。

ではでは ここでも読んでくださつた読者方々、またいつかお会いしましょ

琥春「やらいばだ。」

！？何勝手に出て来てんの！？

琥春「ついノリで。」

いやこ、折角綺麗に終わりそつだつたのに。あんたつて子は。

「なら強制的に終わらせるまでだ。」

「ひつひつへー？」

「ちよひなひ。以上ー。」

.....

不幸やの | 十四 彼女はひとつもなくHロードです。 (前書き)

じも、じんばんわ！レイン氷花です！

最近小説の書き方が変わったかなーと思つたりしてるけど全然変わつてない作者たる私です。

が、楽しんでくれたら本望です

## 不幸その一十四 彼女はひとつもなくエロいです。

「なるほどー、確かに完治してるねー。」

妙に間延びした声の主が、俺の右腕を診察しながら首をかしげる。

「まー、良いかなー。」

良いんだ！？

「腕に違和感もあるー？麗二君ー。」

クイックと眼鏡を直し、その眠たそうな視線を俺に向ける。

「大丈夫です。」

因みに、今話をしているのは外科医の清水透栄さん。シミズ  
トウカ 美花の従姉妹らしい。

「なら今日で退院だねー。」

「そうですね。」

更に一つ言つと、かなり美人だ。

透栄さんの容姿は、膝まで届く薄い茶髪に濃い茶色のタレ目、レンズの丸い眼鏡が良く似合い、顔もスタイルがかなり良い。

「じゃー、退院する前にー、一度検査しましょーうねー」

ゾクッ…！

「ー？」

なんだ今のは…？

パサツ…

「ん？」

顔を上げ、正面を見て俺は、声にならない悲鳴を上げた。否、上げざるをえなかつた。

「うわあああああー！…？何で服を脱いでるんですかあー…？」

だつて、透栄さんが服を脱いでたんですよ？しかもなんか既に下着と白衣だけしか着てないし。

「何でつてー、そんなのー、決まつているでしょー？」

さつきまでの美人でおだやかな顔が、今では獲物を田の前にした飢えた肉食動物のような獣猛で歪んだ表情を映しだしている。

「検査にー、決まつているじゃないー？」

ニタア…と熱に浮かされたように笑みを浮かべて言へ。

イヤイヤイヤ。何を検査するんすか、透葉さん。

「ちゃんとー、右腕が動くかー、私を確かめてくださいねー？」

何を！？右腕であなたの何を確かめるんですか！！？

ボフ

ブライヤーが落ち、透菜さんの胸があらわになる。

「！？なな何を！！？」

ヤバい。黒鹿姉やヘルとは違った肌の...じゃなくて!!!

「ちよこと待つてくれ透栄さん」――

一  
何  
？

良かへた。透栞さんにはまだ理性があつた。

スル：

最後の砦といふか何と言うか、一番危ない場所、もとい下の部分を隠していた布きれがいとも簡単に脱がれた。

「何ー？私に構わないでー、話を続けてー。」

イヤイヤイヤイヤイヤ。構わないでって、無理だから。というか透栄さん。あんたもしや俺と合体をする気じやないだろ？

「イヤイヤ、透栄さん。あなたは一体を何をする気なんですか？」

とりあえず今は一時的にでも冷静に：

「言つたじやないー？ 検査だつてー？」

「いやいやいや、何の検査つて言つんですかー？」

ヤバいな。透栄さんが直視できない。

てか白衣に全裸つて… またなんでマニアックな趣味に田代覚めそ  
な格好してんの？

「男の子としての一、役割を一、果たせるかー、確かめるんですよ  
ー」

役割つて…… それって絶対アレだよね

「拒否します。」

「そう言いながらー、元気になつてるのはー、何ー？」

指差す先は、俺の下半身。… まさか…

「… … …」

恐る恐る見た先には、我が股間の紳士が臨戦態勢に入っていたのが見えた。

- 1 -

…我が股間の紳士よ、素直なのは良い事だが、時と場合という物を選べこんぢくしょ。」

でぬ、遠慮なく、いつきまへす。

二三

一  
痛  
——  
！？

ナニダ…！

飛び掛かってくる透栞さんを見て、俺がもう駄目だ。と目をつぶつた瞬間、鈍い音が前方から聞こえ、続いて何かが倒れた音がする。

二

それを不思議に思った俺が目を開くと、そこには仰向けに大の字で倒れている透栞さんがいた。

そして横には可愛い男の子が。

「清水」？

「久しぶりだね、麗一君 大丈夫だつた？」

「…大丈夫だが、透栄さんを氣絶させたのはお前か？」

氣絶してゐる透栄さんを見る。そしてすぐ逸らした。何故かつて？透栄さんの足はこっち向いてんだぞ？しかも大の字なんだぞ？足の間からパックリ開いてこんなにちわなんだぞ？…

…何言つてんだろ俺。

「そうだよ」

何その満面の笑み。

「…でもまさか麗一くんにまで手を出さうとするとは僕思つてなかつたよ、『じめんね？』

「いや、お前は何も悪い事してないんだし。謝る事ないぞ。」

「わう？ありがとうね、麗一君」

いや、正確には透栄さんを氣絶させた事が悪い事なのか？

「とりあえず、この発情期の雌猫は僕が片付けるから、麗一君は今すぐにでも帰つていいよ」

酷い言われようだな、透栄さん。てか常習犯？

「あー、確かに。今帰つたほうが良いと体中が叫んでるしな。」

「叫んでるんだ…」

「じゃ、明日学校でな。」

「うふ。明日学校で」

…もうこや馬鹿姉とヘル、メアは家でビリしてゐるんだもんか…

「…ま、さつさと帰りや分かんだる。」

と諦めて家に向かって歩きだした。

来ルゾ、『運命』ガ。  
え？

不幸その一十四 彼女はひとつもなくヒロイです。（後書き）

ではさよなら。

メア「待てよ！」

ん？

メア「なんだその出番が初めと終わるしかない可哀相なヒロインを見る日は……」

いや、読者が性格や設定を忘れてるキャラを哀れみのまなざしで見てるだけだが？

メア「……ひつぐ、うぐ……つ……うう……」

いやいや、何も図星を突かれたからって泣かなくても…

メア「天翔ける汝は閃光！」

え？ それって魔法？ 本編ではヘルとフルウしか使ってない魔法ですか？

メア「我が魂に誓いて従え！」

いやいやいやいや、思いつきしネタバレ行為でしょうが、それは。

「貫け！ 一角獣王！ ……！」  
（クエスポン）

ドガアアアアン！－！－！

ぐはあ…！－！作者なのにこの仕打ち…

作者は力尽きた。

ちーん

終わり

不幸その一十五 彼女は精神年齢が俺よつ上だと想こまゆ。 (前書き)

じも、 じんちわー！（？）

なんか最近急に執筆意欲がみなぎってる作者レイン氷花です！

最近麗一の性格が只の変態になっちゃってるよつにしか思えません。

でもそのほうがコメディーとしては良いと思います。 人としてどうかと思いますが。

では、 本編どうぞ

不幸その一十五 彼女は精神年齢が俺より上だと思います。

来ルゾ、『運命』ガ。

え？

「お前まだいたのか！？」

今確かにあいつの声が！？

ウルサイ

な  
う  
！

今ハソンナ事ヲ考エル時、テハナイ。

「どうした？」

前々見テニ口。

「ん？小学生の女の子が一人いるがどうかしたか？」

馬鹿ガ、ソイツナンダヨ。

「?回りくどくてわけ分かんねえんだが…」

トリアエズ注意シロ。

「だから向こへへ。」

「うう…

「…おおつこつて、おのこの聞こへ？」

靴音に反応し前を向くと、さつさまで一〇三近く離れていた筈の女の子が、目と鼻の先にいた。

「ククク そんなに驚かないでも良いじゃないか」

「驚くだろー普通はー。」

才前ハ普通ジャナイダロウ。

「まつとカー…て、あ…」

「ククク 仲が良せそつで向よつだよ。」

「どいがーー？」

…………あれ？

「…おい…お前、分かるのか？」

「ククク」

……ヤバい。なんか知らんがこの女の子ヤバい。さつさまで気が付

かなかつたけど」こいつ…

「何を怯えているんだい？」

「……？」

心を読んでやがる！

「ククク」

「… …」

悪魔か… それとも、新手か… ?

…じつにしか、使わなきゃ死ぬ… !

「… 自分自身に対して術をかけたね？」

！俺の手の内は既にバレてるか…

「それも、自身の身体能力を上げるタイプの物を。」

「お前は一体、何だ？」

そこまで見破ったのか…？

「ククク、分からぬかい？」

そこで女の子は笑うのを止め、その少しつり上がった目で俺の目を真直ぐに見据えて、言った。

「君と同じような存在だよ、五膳麗一の偽物くん。」

「…？」といつ意味だ

チュウ…

おい…なんだこの唇に感じる温かさは。

…クク、キスだけど何か?」

「…ななななんでつ…!？」

「理由が分からぬい?まあ、当然だろうね」

当たり前だ!!

「別に理由は今分からなくとも良いんだ 分かる必要も利益も無い  
からね」

女の子はそう言つて顔を離す。

「…でかお前つて…」

「ああ、そう言えば自己紹介をしていなかつたね。」

今更か。

「僕は坂井涼<sup>サカイ リョウ</sup>。近所の小学校に通つてはいるけど、会つのはこれ  
が最初で最後だよ。」

なんだよそれ…

「言つてゐるぢやないか、僕と会えるのは」ねつまつて事だよ。」

「随分自信たつぱりに言つな。」

「僕は先が分かつてゐるからね。」

？はい？

「？先が分かつてゐる？それって未来予知…」

「とは違うね、僕の未来を知るわけぢやない。」

「じゃあなんだ。」

「知りたいかい？」

「もつたいたぶるなよ。」

「クク、それが知りたいなら条件がある。」

「あ？」

条件付きかよ。

「僕に色々と（性的に）体に教えこんでくれたら良いよ」

「何言つてんだお前は。」



「結論で言つて、結構うなんだね（性的な意味で）」

「もひへ、嫌だ…」

「ゆづかこ」いつが嫌だ。

「あ。もうこんな時間か…」

「ん？」

点滅している携帯の画面を見ながら、涼が呟く。

「名残惜しいけど、僕は門限に間に合わなくからひきつ失礼するよ。」

「そうかいそうかい。」

「おや？ 悲しくないのかい？」

「とこりうかやつと姉心出来るし。」

「ククク、つれないねえ？ あんなに楽しく喋つあつたじゃないか。」

「お前がなーー？」

「本当にうちと時間がある時に話しかいていたいものだけど… 残念かな。もう会つ事は無いから悲しいね。」

「… そんなに俺と話せて楽しかったのかよ。」

「勿論。出来るならセ○レになつたいくらいだよ。」

「いや、お前ほんと元小学生か？」

「一応ね。」

「一応かよ。」

「だから小学生は門限を守らなければいけないんだ」

「不便だな。」

「まあね。」

「……………どこか帰らなくていいのか？」

「あ……忘れてたよ。わたくしなら、五膳麗一の偽物ぐる」

「偽物ゆつな、涼。」

「ククク、また会つたら考へるわ。」

「絶対会つてやるよ。」

「……期待しないで待つておへよー。」

振り返りすこに手を振る涼の後ろ姿を見ながら、俺も少しあく手を振った。

「あれ？ 結局涼は何の為に俺に会いに来たんだ？」

…今頃力、才前ハ。

「なあ、お前は分かるか？」

知ラン。ダガ、『運命』ハ氣マグレダカラ、氣マグレテ何モセズ  
ニ帰ツタンダロウ。

「なんだそりや。」

モシ、『運命』ガ本氣テ才前ト戦ウツモリダツタナラ…

「だつたならなんだよ。」

「チラ一勝目ハ無カツタ。ソレドコロカ、相手ニモナラナカツタ  
ダロウ。

「マジかよ。あんな小さな女の子がそんなにか?」

姿形等関係無イ。重要ナノハソノ能力ダ。

「ふーん、意味分かんねえ……」

話ニナランナ。

「そりゃ失礼した~。」

俺ハ休ム。コントナラ一人デヤレ。

「ひでえなテメエ。人の頭ん中にいるくせして。」

勝手ニヤツテイロ……

「おい、なんだその物凄く投げやりな言い方は?」

…

「おい、どうした?」

「お~い、生きてますか~?」

…

…

「…………」

…

「……帰る。」

視界が歪んでるけど気にせず進んでやる…別に泣いてなんてない  
んだからっ！

…

「……シンデレラ、やつぱり金髪だな…」

いや、金髪以外でもいいけどんだが。

と少々イタイ事を考えながら、俺は帰路についた。

不幸その一十五 彼女は精神年齢が俺よつよつだと思こまか。 (後書き)

「」まで読んでくださった読者方はありがとうございます

さて、「」では主にちょっとした小ネタと重要な報告について語りたいと思います

まず、投票は一応四十話まで継続します。

以上。

ロメア「報告少なつー!?」

だつてないんだもの。

ロメア「なら私と語り合おうよー。」

何を?..

ロメア「勿論、夜のテクニ」

ではやうやくならー!

ロメア「勝手に終わらさないでーー。」

終わり

## 不幸その一十六 彼女は記憶が戻りました。（前書き）

今日は長いです。しかも駄文レベルも比べ物にならないです。物語を書く資格が自分にあるのか無いのか書いている間思つてました。

さて、長つたらしい前置きはさておき、本編へ早速行くとしますよ！

ヘル編スタート！！（続きません）

## 不幸その一十六 彼女は記憶が戻りました。

ドガアアアアン！……！

「一風絶陣！」

ヘルが叫び、薄い緑色の膜がヘルを中心に展開。

迫つて来た光の柱を防ぐ。

「…」

…何だこれは。

久々に帰つて来たといふの、元のどう有様ですか」「う。

「麗ー！今来ちゃ危ないからビックリ隠れてー！」

うん、言われなくとも。…だがその前に聞きたい。

「なんでお前達が戦つてんだよ」「丽ー！？」

しかもお前ら、非現実的な力を使つてゐるせいか被害が大きいん  
だが…主に俺の家が。

「ゴメン麗ー！今は理由を話せないけど何とかするから…！」

何とかするつて言つても……もつ手遅れな気がするんだが、家の損壊状態が。

ガキインー！

「退いてください！」

ヘルがいつかの変な形の刀で斬りかかってくる。

「嫌です！」

それをメアが細い剣でガードする。

「私の仕事は五膳麗一を消す事です！だから邪魔をしないで下さい！」

ガギイ！

変な形の刀を一瞬引き、メアの懷を通してヘルが俺に向かって再び斬りかかる。

「終わりです！」

刃が俺の首を狙つてくるが、俺はそれを難無く後ろに跳んでかわす。

「記憶が戻ったのか？」

「そういう事は俺の術はほぼ完全に解けたから…

「そうですよ。」

再び変な形の刀を構えなおす。

「ふむ、だが良いのか？」

「何がですか？」

「俺の術が解けたのは分かつたが、お前は一つ忘れてないか？」

「?何を……あ…」

「よし気付いたか。」

ヘルの顔があの時とは比べ物にならないくらい赤く染まっていく。

「な…ななな…あ、うああ…う嘘…」

呂律が回らない程か？

「いや、残念ながら本当だ。」

そういうと、この世の終わりのような顔をするヘル。

いや、まあ…裸を見られて、その上食事や排泄といった世話をしてもらつたからって嫁にいけなくなる訳じや…いや、いけないかもしないかもしねないな…

ガガーンー！

と聞こえそうな程に更に絶望に染まるヘル。…なんで？

「声に出しました。」

え？ メアそれは真か？

「本当にです。」

といつ事は…

「…仕事なんかもう関係ありません。絶対に抹消します。」

やつぱりか～（トロト）！

「てかまた俺の術を食らひたら、あの失態の一いつの舞だぞ？」

「…大丈夫です。その対策はもつ既に考えました。」

ほつ？ 是非聞きたいもんだな。

「じゃあ、俺から行くぞー！」

とつあえず氣絶させんのが先だな。

「…」

「これで氣絶した筈…

「無駄ですよ。」

「な…。」

何でだ！？

「何故かお分かりにならないのですね？」

「当たり前だ。」

「なら良かつたです。」

良ぐねえやい。

「ですが、あなたの唯一の戦う術は私には通用しなくなりました。」

だな）。てか軽くピーンチ

「次は私の番ですね。」

といつて向かって来るヘル。

「 。」

「無駄ですよーーー！」

変な形の刀を振りかぶるヘル。だが、お前は勘違いしているぞ？

「終わり、ですーーー！」

パキィインーーー！

次の瞬間、何かが折れる音が響いた。

「…? なんで…」

次いで、ヘルの動搖した声が聞こえる。

「あなたは普通の人間の筈! なのになんで私の刃をへし折ったの!  
? しかも一度ならず一度目までも! ! !」

「簡単な事だ。相手に俺の技が効かないのなら、相手では無く自分  
自身に使用すれば良いだけのことだ。」

「そんな、事が! ?」

「ああ、それと。俺が今自分にやつたのは、筋肉に作用するもんで  
な? 身体能力を普段の五倍から八倍くらいまで無理矢理上げるもん  
だ。」

「そんな事をしたら、人間の体は、いとも簡単に壊れちゃうんですね  
よ?」

「知ってる。だがそれでもしなきゃならん立場だからな。」

「あなたは…本当に魔王を愛しているんですね…」

「さあな。…だが、大好きだ。」

「…『気が変わりました。』

「ん?」

「今なんと?」

「気が変わったと言つたんです。」

「何故?」

「…あなたを殺すのは、私の美学に反しますからね。」

「いやいや、意味分かんねえんだが?」

「ですが、私も仕事を途中で投げだす事はしたくありません。」

「あの~、話がさつきから見えないのですが?」

「…ですから、条件をだします。」

無視ですか、スルーですか。

「条件?」

「はい。その条件を満たす事が出来たなら、私はあなたを殺すのを諦めます。」

「へえ~、見逃してくれるのか。」

「はい。」

「何かやけにあつたり諦めるんだな。」

「ですがその条件を満たさなければ無理ですよ?」

「うえい」

めんべくセー。だがこれでヘルから命を狙われなくなるのは良いな。

「で、その条件は？」

「簡単な事です。あなたが私が放つ、魔法による全力の一撃を受け止めるだけですよ。」

：今なんと？

「魔法……」

あの、さつき連発してた意味分かんねえ爆発とか光線とかの事か  
よ。……………イヤイヤイヤイヤイヤ、どうからどう  
見ても身体を強化しただけで防げねえから。良くてバラバラ死体と  
かだろ。

ଶ୍ରୀମଦ୍ଭଗବତ

「イヤイヤイヤイヤイヤ、まだ心の準備が…」

「風よ、大気よ、刹那の時にて集え、」

「我が言靈を刃に、斬り裂き、刻め、」

1

なんか空気の流れがおかしい？

「破壊と殺戮の果てに、死者の名を刻もう……。」

ヘルの周りの空気は、緑色の光が飛び交つ。

なんだ、これは？なんだ、この感じは……！？

「風属性、最上級魔法……」

と、右に100㍍くらい離れていたメアが呟いた。

「……信じてます、麗一さん。」

そしてヘルは少し微笑むと、両の手の平を突き出す様に俺に向ける。

「風葬。」

「オオオオー！！！」

風が起こすと思えない音がする。

そして、その音と共に、俺とヘルの間にある空間に存在する物体が、その姿を無惨に変形させ、碎かれ、切り裂かれ、一つの例外も無くその原型を無くしていく。

「ヤバい……」

足が動かない。それに動悸も激しい。

だけここで諦めたら、今までの約束やら誓いやう、想いが、心が意味を持たなくなる。

「 、 。 ！

なら、本氣で死ぬ気でやつてやるーー

「 、 。 、 。 、 。 、

：！「

身体能力をギリギリまで高めて、あの風の魔法を正面から受け流す！！

「 ！

行くぞ！ー！

バキバキバキバキビキビキビキビゴキゴンシャグチャグチャ  
バリバリバリベキゴキーーーーーーーーーー

【ヘル視点】

「…」

風葬は直撃。威力も精度も完璧な一撃が、五膳麗一を飲み込んだ。

普通の人間なら原型を残さずに只の肉塊に成り下がる。

だけど、五膳麗一は違う。

普通の人間では持てない稀な技を持っている。

しかも魔王に認められた人間だ。

…だけど、私の切り札、風葬は属性魔法の最上級に位置する魔法。

例え上級悪魔でも、まともに食らえば命の保証はない。

ガラ…

…なのに、なんでだろう？

ガタ…

なんでもござんなも、

ハハハ…

五膳麗一が無事だと、祈るより何よりもして血信を持って思えるの  
だわづか？

「… よお、ひやんと見てたかよ。俺の勝ちだ。」

### 【麗】 視点

「… よお、ひやんと見てたかよ。俺の勝ちだ。」

痛む体に鞭を打ち、立ち上がって真直ぐにヘルを見据えて言った。

「…」

何とか言えよ。

「確かに、私の負けですね。」

「…」

「約束通り、あなたを殺すのは止めます。」

「よつしー。」

「それと、一度も負け、しかも記憶を失つてこる間の身の回りの世話をまでしてくれてありがとうございました。」

「あ、ああ…だけどあれは俺が原因だし…」

「理由とか原因はともかく、一応は御礼を言わないと気がすまないので。」

「はあ…まあどうこたしまして。」

「それでは、やむづなう。」

「おい、帰るのか?」

「はい、私にはもう、ここにこる理由が無くなりましたから。」

「…なんか娘が嫁ぐみたいに寂しきな。」

「嬉しいお言葉です。では…」

「一角獣王!—!!

「ドガアアン!—!!

「 「 ...?」

突然、ヘルの前の地面に何かが物凄い音をたてて落ちて来た。

てかあの声はメアか?

「ケホ、何のつもりですか?メアさん。」

「ゲホ、ゲホ...!」

本当に何のつもりだ。

「ケホ、ヘルちゃん!」

「?」

「帰るなんて嘘を言つてもお見通しです!!!」

メア、何が言いたいんだ?

「ヘルちゃん達のような殺し屋は、仕事で失敗した時点でもうその人生は真っ暗です。」

?どう言つ、意味だ?

「その後、奴隸として買われるか、貴族の愚か者の元で性の捌口として体を汚したり、解剖されたりする実験体とかにしかなれないのは分かっているんですよ?」

「...ですか。」

「なんでそんな事黙つてた?」

「…

「ヘルちゃんは綺麗でスタイル抜群だから、多分貴族とかに買われると思う…」

何なんだよ、じゃあヘルは、それを覚悟して俺を見逃したのかよ?

自分を犠牲にしてまで?

「…

「…

「…

許さねえ、そんな結末。俺が否定してやる。

才前二ナー二ガ出来ル?

うつせえ…ならお前も考えやがれ。

俺ニ頼ルカ?所詮、偽物ノ発想ダナ。

黙れ。今はそんな嫌味はいらん。

ホウ…

俺をどんなに馬鹿にしても腹んでもいい。だから、一緒に考えて  
くれー！

：

頼むーー！

……偽物ト言エド、少ナカラズアイツノ性格ヲ受ケ継イテイルヨ  
ウダナ、貴様ハ。

あいつ？

良イダロウ、良ク聞ケ

！ああつーー！

…ト、口ウ言エバハイ。

良し、分かつた！

「…なあ、なんでわざわざそんな所へ帰らなければならぬんだ？」

「私達は予め契約をしてるんです。」

「契約？」

「はい。絶対に破る事の出来ない約束みたいなものです。」

「それで、どんな契約をしたんだ？」

「任務に失敗した場合、私達はその全てを、魔界に帰つた時点で譲渡しなければなりません。」

「?すまん… もう少し分かりやすく頼む。」

「勿論、拒否は出来ません。」

無視かよ！

「…えーとつまりだ。俺が一緒に行けば良いんだな？」

「 「なんでー!?」

「なあ、全てを譲渡つて、相手がどんな奴でも有効なのか?」

「え…あ、はい。」

「よし、俺も魔界とやらに行くぞー。」

「だからなんですか！？」

「…まだか…？」

「え？ メアさん分かつたんですか！？ 教えて下さいーー！」

「いや……言わないほうが面白いから言わない……ふふ……」

と意味に気付いたメアがかなりのニヤけ顔で言う。

「魔王様には私が謝つておくよ、勿論誤解がないように、です」

「ありがとな、メア

と二人で半分笑みを浮かべ、もう半分はニヤけるというスゴ技を使っていると、ヘルが申し訳なさそうに呼び掛けて来る。

「じせあ、行く麗一

፩፻፭፻-፪፻፭፻

メアが地面に魔方陣？みたいのを展開し、俺がヘルの腰を掴んで抱ぐ。

「え？え？何を？する気なんですか？」

ヘルは無視つと。

ヘル、あつちで待ち伏せしてゐる奴等はいるか？」

一  
い  
ま  
す  
」

「よし、なんとか行けやーーー！」

ヘルの暗い顔をこれ以上見たくない為、メアを急かす。

# 「次元の柱、逝け！！」

「字がちつがーーうつ！？！」

視界が歪み、感覚がおかしくなる。

てか酔いそう。これじゃ気を失うのも時間の問題だらうな……

「つかせつたよ…」

「ん? な、あ――――――――――――――――?」

うん。無様だ。でも悲鳴を上げたのは何も化け物がいたからとかそんなんじゃなくてね、うん。高いんですよ。なんでこんな高いんかな、高層ビルくらいの高さがあるよ、コレ。

「大丈夫ですか、麗一さん？」

心配そうに、担がれたままのヘルが言つ。

「！大丈夫だ！そして聞いてくれえい！！！」

「！？」

余裕無いな、自分。口調おかしいし。

「はい！？」

瞬間、ヘルの体から綺麗な緑色の光が発生し、俺に巻き付き、すぐには消え去った。

「よし……契約完了」おおおおおおおお……セシルニアの口から  
う………?」「

地面が、もつすぐそこまで来て……

「着地は任せて下さい。」

ヘルの声が聞こえた瞬間、体が急激に軽くなった。

一  
儿！？

そしてヘルを見て、少し驚いた。

卷之三

あさ・とく・たわ・い

重力生テなしニテナシ

本草綱目

17

それより麗一さん

1

「どうして私の全てを寄越せと言つたんですか？」

「ああ、それか。どうせなら俺の物にして出来る限りヘルを自由に

したいと思つてな。」

「… そうですか。でも、周りを見た方が良いですよっ。」

「はい？」

とヘルに言われて周りを見回し、後悔した。

「おい、こいつ人間じゃねえか？」

「なんでこんな所に人間が？」

「食つちまうか？」

…「うん、めつちや困まれてるね。

「おーーーそこの悪魔の女！」

悪魔達の間から、偉そうな服着た悪魔が出て来てヘルに言つた。

「お前がヘルガ・ドルスターだな？」

「はい、そうですが？」

冷めた目で冷静に対応するヘル。

「オークションに着いて来い。」

偉そうな服着た悪魔がそう言ってヘルを連れて行こうとヘルの腕を掴もうとするが、ヘルが腕を叩き落とす。

「お断りします。」

とヘルが言つた瞬間、空気が凍つたように音が静止した。

「…お前は契約に逆らひぬか?」

「いいえ、とんでもあつません。」

若干苛立ちを含んだ悪魔が問つ。

が、ヘルはそれに反比例して笑顔で答える。

「詮つてこる事とやつている事が矛盾しているぞ、このクソ女。」

「いいえ、矛盾なんてありませんよ?だって、既にこの人間に全てを譲渡しましたから。」

ピキイ——ン…

再び、空気が凍つた。しかも今度は効果音付きだ。

「私の全ては既にこの人間に譲渡されていましたから、オークションに行く必要なんて無いんです、ハイ。」

とてもハイテンションに喜々として語るヘルとは反対に、周りの悪魔達の反応は同じくらい冷めていた。

「…人間を殺せえええ!—!—!—!」

その言葉と共に、周りを囲んでいた悪魔達が襲いかかって来る。

「しっかりと掴まって下さい、麗一さん。」

とヘルに腕を掴まれたと気付いた瞬間には既に、ヘルは悪魔達から少し離れた所に立っていた。

「御主人様 命令を」

何故に御主人様!? ヘルに言われて嬉しいけども…!

「…適度にボコボコ?」

何故突っ込まない自分……………

「はい 分かりました御主人様」

とヘルは軽く会釈をし、悪魔達に歩いて向かっていく。笑顔で。

「では 命令なのでいきます」

ただいま、大変年齢制限のかかる描写がありますので飛ばします。

「すげ…」

ヘルって見た目以上に強いな。あの悪魔達が成す術も無くボコボコ…

「麗一也。」

「ん?なんだ?」

「おひがじハジマホ。」

「気になくてもいい。俺が原因でこんな事になつたんだしな。」

「ふふ…麗一さん」

卷之三

唇が温かい。ヘルの顔が近い。導かれる答は一つ！

h  
—  
—

なぐて元々はこのほんがんぐで立がんぐ

心はるゝハリにきなり何をしやがる

一何つて、御札です。

いやいや、気にすんなって言いたよな!?

「じゃあ、私がしたいからしたんです。つて事にしておきますね。」

あーもういいや。疲れた帰ろ。

「そうですね。そろそろあつちに戻つたほうが良いですし。」

「で、どうやって戻るん?」

「私が魔法と一緒に帰りますから、手を握って離さないで下さいね。」

「おひ。」

「次元の柱。」

短かつ!?-かうわつ!-!-?なんかさつきより強烈なんだけども  
!!?

「着きました。」

「ん… セニョリ… おひ。」

ヤベエ…「冗談抜きこもどしそ。

「ところで御主人様。」

「なんだヘル?」

「また一緒に、住んでも宜しいですか?」

「当たり前だ。…おひ。」

「ありがとうございます」

あ…メアが走つて来る。てか、なん、か、い…しき、が…うす、  
れ…て…き…た…

ドサッ…！

「御主人様！？」

「麗一！？」

一人が駆け寄る。

「…すぴー…」

「…」「…」

寝てんのかい！？無駄な心配かけておいて…！！

と二人のツッコミが重なった瞬間でした。

「おひや……麗……私のう……初めて貰つてえ～……」

外の騒ぎで一切起きなかつた馬鹿姉でしたとや。

どうだけよー?~?

## 不幸その一十六 彼女は記憶が戻りました。（後書き）

ども、こんばんわ、レイン氷花です。

最近は何故か自分を見失っているようにしか見えない文を書くな  
と思うこの頃。

何故かヘル編をおもいついてしまいました。

そのせいか一日を無駄にしました。

そして今日気付いたのですが、僕は主役キャラより脇役キャラのほう  
が長く語れると思いました。

ヘル「普通の事じゃないのですか？」

多分ね。

相変わらずオチ無しで終わる後書き。

またね

不幸その一十七 彼女は箸が上手く使えません。（前書き）

ども！最近視力が落ちたな～と思つレイン氷花です！

唐突だけど、うん。最近麗一の不幸が少ない気がしました。

でもでも安心してください！麗一の不幸はこれからが本番なので  
すから！

では本編をどうぞ

## 不幸その一十七 彼女は箸が上手く使えません。

「眠い…だるい…軋む…」

朝起きてからの感想がそれだ。うん。

何故こんな事を言つたかといつて、至極当然の事だ。

昨日の、記憶の戻つたヘルとの人知を超えた戦い、空からの落下、術の反動による全身の筋肉痛…うん、普通の人は死んでるね。

「じつかし、良く生きてるよ。ホント…」

…そういうえば、ヘルに俺の術が効かなかつたのはなんでだ?

「コソコソ」

「麗一さん、起きてますか~?」

ガチャと返事を聞かずに入ってきたヘルは、俺が起きてるのを確認して眉間に少し皺を寄せた。

なんで?

「麗一さん、起きてたんなら返事してくださいよ。」

いやいや、返事しようとしたら入つて来た奴が何を言つ。

「まあそんな事より、朝食が出来上がったので早めに降りて来てくださいね。」

と叫び、部屋を出て行こうとするヘルを俺は呼び止める。

「なんですか？」

「昨日、俺の術が効かなかつたのはなんでだ？」

「ああ……それは簡単な事ですよ。」

「?.?.?.とも簡単じやないと思つんだが……」

「一から説明したほうが良いですか？」

「頼む。」

だからその出来の悪い息子を見る母親の様な目で俺を見るな。

「麗」さんの術つてのは音で相手に作用してますよね？

「そうだ。」

確かに、概…とゆづ音に近いからな、俺のせ。

「で、私は風を自由自在に操れます。」

「やうみたいだな。」

昨日のあのなんか周りを碎いていく様は、ハリケーンより数倍上  
だと思ひう程だしな。

「といひで麗一さん。音は真空中を伝わらないのは存じですか？」

「ああ。」

「それですよ。私は風を使つて自分の周りを真空の膜で覆つて術を  
防いだんです。」

なーるほどー、そういう事か。

「て…それ使われたら俺勝田無いじゃん…」

「ですねー」

ですねーって、そんな満面の笑みで言わないでくれよ…

「では、私は先に下に行きますね。」

ガチャ、バタン…

とヘルはドアを開けさつと下におつていった。

さてと…

いるんだろう？

…良ク分カツタナ…？

違和感バリバリなんだよ。

ソウカ。…ソウイエバ、アイツモソウ言ッテイタナ…

アイツ？誰だそいつ？

フン…才前ガ知ツテモ意味ノ無イ事ダ。

なんか腹立つ言い方だな……

才前ト話シテイルト疲レル。無駄話ハコレクライニシテ、サツサト下二行ケ。

## 腹立つなこいつ

「麗一ちゃん、早く下りて来てくださいねーい。」

下からヘルが呼んでるのが聞こえる。

「おせむり」

「おはよう、メア。」

「おはよー麗ちゃん」

声に振り向いた先は見事なメロン……じやなかつた馬鹿姉の胸が視界いっぱいに広がっていた。

۲۷۸

ヤベ……息が……

「つへー！ もげむふあーーーー！」

訳

もうされてるけどそれはスルーでお願い。

ミシシピ

いつもの如く締め付ける。うん。不可抗力で胸がわーいだな、うん。

「痛!? 朝から激し過ぎだよ麗一ちゃん…?」これじゃ私壊れちゃう

訛

「誤解される事言つな——！——！」

因みにそれから五分くらいたつてやつと馬鹿姉は離れてくれた。

「朝から無駄な体力使わせんなや……」

だが昨日の疲れがとれたのは不思議だ…心当たりはあるが。

「なに？麗一ちゃん また私の胸に抱かれたいの？」

と視線を感じた馬鹿姉が満面の笑みで聞いてくる。なんでこんなのは鋭いんだ…

「結構だ。」

て、あれ？俺より先に下りた筈のヘルがいない？

「誰をお探しですか？」

「うわあつ！？」

スウ…て感じに後ろから突然ヘルの声が聞こえた。その為にかなり間抜けな声をあげたのは反省。

「なんですかその幽霊を見たような反応は？」

「いやいや、いきなり背後から声が聞こえたら驚くだろ。」

「では今度は横か前からにしますね。」

「ああ、頼む…てなんか敬語つて嫌だな。別に敬語を使わなくとも良いんだぞ？」

なんか他人行儀みたいで嫌なんだよな。

「いえ、私は敬語以外喋った事があまり無いので…」

「やつかい。なら敬語でもいいや。」

「ありがとうございます。」

いやいや、そんな頭を下げなくとも…

「やうですか？では次からは善処します。」

「あ、ああ…」

敬語やつぱ喋つこきこ～！

「麗」、早く椅子に座つて朝ご飯食べよ

「やうだな。」

と返事を返して俺はヘルの横に座つた。

「え？あのメアさんの隣に座らないんですか？」

「へ？どうしてだ？」

「どうしてって…麗」そこはメアさんと座つたほうが直しこじやないんでしょうか？」

「ヘルの世話を覗なきやいけないので…」

「え？」

「あ…そつか。ヘルは記憶が戻ったから、手助け要らないんだつた  
な。」

「そりですよ。」

「て事はだ。食事は勿論、入浴や着替え、トイレの世話にその他諸  
々の手助けは要らないで事だな。」

「…」

「…どうしたんだ?…ヘル?大丈夫か?」

何故いきなり無言になる?それに心なしか顔がトマトのよつに赤  
く…

「あちやー…これじゃ後数十分はこのままね。」

馬鹿姉がヘルのおでこに手を当てながら囁く。

「…仕方ないが、私達は先に食べちゃいましょう。」

「良いのか?ヘルこのままで。」

「大丈夫よ、自然に元に戻るから。」

「そりが…」

「では、いただきまーす。」

「いただきーす 」

「 いただきーす。 」



因みに、それから約三十分くらいたつてやつとヘルが正氣を取り戻した。

その頃には俺達はもう食べ終わってたけどな。勿論ヘルの分は残して、だ。

更に備考。ヘルは箸を上手く使えないみたいだ。

んで結局、スプーンで食べさせるのもなんか食べずらううなので、俺がアーンして食べさせたんだが、何故か終始顔が若干赤かつた。

ヘルの頬に赤みがさした照れたような恥ずかしがつている表情は、なんかかなりキタ。なんかじつ...「ゴメン言葉に出来ん。

不幸その一十七 彼女は箸が上手く使えません。（後書き）

ヘル「作者の駄文を読んで下さつてありがとうございます」

ちなみに、まだ人気投票が続いています。投票お待ちしています  
ではさよなら

## 不幸その一十八 彼女は意外にも可愛いものが大好きです。（前書き）

どもー最近思考が変態化してきたレイン氷花です！

冬休みなのに更新が中々出来なくてすみません！

でも更新スピードを上げようと努力はしますんで、応援宜しくです！

後何回も言つちゃウザインですが、キャラ人気投票は未だに続いています。

ですから、遠慮なんかせずにバンバン投票してください！てゆうか  
お願いします！

では、いい加減作者のテンションがウザくなつてきたので、本編を  
どうぞ

不幸その一十八 彼女は意外にも可愛いものが大好きです。

「いつてきまーす！」

朝ちよいど」たごたしてたが、何とか無事学校行けるな。うん。  
と久しぶりに家からの登校という事で、元気に挨拶をして玄関を  
抜けた先には、これはこれは久しぶりなメンツがいた。

「…」

「おはよう、麗一君。」

「久しぶりだな。というのは間違いか…おはよう、麗一。」

うん。誰が誰か分かりやすい挨拶をどうもありがとう、諸君！

「じゃ、行くか！」

バタン！－

「待つてーーー？私を置いてかないでよ麗一ーーー！」

突然、玄関の扉が開いてメアが出てきた。しかも制服着て…

「ゴキツ…ーー！」

「ふぐはあーーー?」

そして何故か物凄い勢いを殺さずに俺に抱き着くメア。そのせいで首が不吉な音を鳴らしたのは無視する。

「だが痛てえ……てかレアどうして制服着てる…?」

「え? 麗一は私が学校通ってるの知らなかつたつけ?」

は?…………ああ……そうこや萌がそう言つてた気がする……とか忘れてたよ」んちくしょー。

「しかも似合つてゐし。」

外見は中学生なんだが、何故か我が校指定の制服がかなり似合つてゐる。

「そんな事言つたら照れるじゃない、麗一」

朝からテンション高いな、メア。てか違和感バリバリなのは何故?

「ん?」

複数の視線を感じて、視線の方を向く。

「……ラブ」

「あはは……まるで夫婦みたいだね、麗一君。」

「朝から惚氣るとは……やるな。」

三人がそれぞれに意見を述べる。…琥春よ、前の二つは大体分か  
るが、お前のは意味が分からぬ。

「麗一君。もう出発しないと遅刻するから、行かない？」

「あ…じゃあ行くか。」

「メアとイチヤイチヤしたいのであれば、私達は空氣を読んで先に  
行くが？」

「結構だ。メア、行くぞ。」

琥春よ、それは読まないで良いから。

「うん。」

そして、來桜、美花、琥春、メアと一緒に学校へと歩きだした。

~~~~~

そして、学校に近い通学路にて。

「…なあ…」

「なんだ？」

「いや、なんだじゃなくてよ。琥春は感じないのか？」

「さつきからある周りからの視線の事か？」

「気付いてるじゃねえか。」

「当たり前だ。こんなにもあからさまに視線を投げかけられているんだ。気付かない方がおかしい。」

「ですよねーでも俺は何故か殺意や憎悪の視線を感じるんだよねー、約八割野郎どもから。てか一割の女生徒達が俺にそんな視線を向ける意味が分かんねー

「それは多分、黒川さんのせいだと想つよ。」

「?何でだ?美花。」

女生徒から受ける視線の原因が何故琥春?

「黒川さんて……その……モテるんだ。」

「確かに、あの眼光さえ無ければかなりの美少女だからな。」

俺ん中ではベスト5に入るし。…因みに、ロメアは勿論一位だ。

「違くて、黒川さんは特に女の子にモテるんだよ。」

……はいいい!?

「琥春。お前ってガチ百合だったのか?」

前を歩いていた琥春が振り向く。

「私にそつちの趣味は無い。……といふか麗一、貴様、面と向かつて私に問うとは意外に肝がすわっているな。」

百合属性は無いのか……まあ、現実にそつあるもんじやないし。当たり前か。

「そんなんより、俺はお前が何故女の子に特にモテているか聞きたい。」

「きつかけは不良に絡まれていた可愛い女生徒を助けた事だった。」

「ふうん……ありがちなパターンだな。」

…………あれ? わざわざ”可愛い”女生徒つてつける必要あるのか?

「そしたら、その事が次の日には既に学校中に知れ渡つていてな。朝教室に着くやいなや、助けた女生徒と他可愛い女生徒達が私にお礼を言つて來たんだ。私は別にいいと何度も言つたんだが、女生徒達は絶対に納得しなくてな。だからここは折れて、言つてしまつたんだ。」

「へえー、なんて言つちゃったんだ?」

「気がすむまで私にお礼でも何でもすればいい。とな……」

「? それだけ?」

「ああ……だがそれが私自身間違いだと気付いたのは、そりゃいつに
まつた日の翌日だった。」

なんか、この先の展開が大体分かるぞ…

「翌日、学校の門をくぐると同時に、助けた女生徒と他の女生徒達
が出迎えてきたんだ。」

わー…

「しかも、その女生徒の集団は私を一日中付け回し、昼休みの時間
は私を囲んで弁当を食べるといった事をしてきただ。」

「……なんか、ハーレムを実現させた貴女が神に見えるよ。」

「馬鹿を言つたな。実際にその立場になつて考えてもみる……絶対ハー
レムが嬉しいとは言えなくなるぞ。」

…なんか、その口振りだと…

「何かそれ、前々から女の子に囲まれたい。と思つてた様に聞こえ
るんだが?」

ギク…!

琥春の顔が強張る。

え? 何今の反應…

「もしかして本当はそっちの趣味が…」

「違う…！私はただ、可愛い女の子に囲まれたいと前から思つて…た…だけ…」

…ボロ出したな。

「べ、別にそんな趣味があるんじゃないからね！？勘違いしないでよねつ……？」

…何故にツンデレ？

「焦りすぎだぞ…琥春。」

「い、いや…私はただ、可愛い物が好きだけだ…あ…」

凛とした容姿に似合わず随分女の子らしい趣味してんだな…とか、そのギャップが良いかもしれん。

…許容範囲

と來桜の助け船。

「來桜…ありがとう。」

若干涙目の中春が、來桜にお礼を言つ。

「…誰にでも、人には言えない嗜好、趣味がある…勿論、私も…」

だがその一言でまた琥春は落ち込んでしまった。

「来桜よ、それ言つちやダメだよ。」

「…………と……無駄話してゐる間に一つの間にか学校の前まで来てたのか……」

なんか畠で登校しただけでかなり時間が経つて錯覚してまつな……

ていつか今日の琥春はキャラ壊れすぎだろ……

「思春期なんだよ、麗！」。

メア、お前もなんかキャラ壊れてねえ？

「思春期だよ」

…………なんか、疲れた……

と黙り登校中でした。

不幸その一十八 彼女は意外にも可愛いものが大好きです。（後書き）

今回の出来はどうでしたか？楽しめましたか？

出来れば感想を述べて下さい それを参考に、作者はこの小説を良くしていく氣ですから

ロメア「これからも、私と麗」の淫らな愛の物語を宜しくね

麗「誤解される様な言い方するな！！」

またね

不幸その一十九 彼女達は意外にもチームワークが良いです。（前書き）

それでは本編どうぞ

不幸その一十九 彼女達は意外にもチームワークが良いです。

「……で、なんで俺の右隣がメアで、反対に來桜、前に琥春で、來桜の前が美花なんだ？」

と冒頭から、陰謀の匂いを感じる席順を見ながらツッコンでみた俺。

「なんでも、同じグループの人と近い席にしたほうがチームワークが良くなるから、ていう理由らしいよ？」

「そうなんだ……」

何気に萌ちゃん考えてんなあ……

「ところで麗……！」

「なんだ？」てかいきなり大声で呼ぶなメア。」

今のでクラスの皆がこっち向いたんですけども！？

「これからは昼も一緒にいられるね」

ギロ……！

なんか視線が殺意に変わったんだが……主に男子の。……てか……

「お前、それ言つたら黙だら…」

今の一言で一緒に住んでる事バレたな…ほら、こんなにも殺意の視線が俺に集中…

バゴオオン…!!

「おはようー諸君ー！」

突然の破壊音と共に、このクラスの担任にして喧嘩大好きの萌ちゃんが元気良くなつて來た。

…てか扉壊すなよ…

「早速だが出席を取るぞーーーまず先に來桜！」

「…」

「よし、全員いるなー！」

いやいやいやいや、今のはなんだよこの税金泥棒。はしょりすぎだろ絶対！しかも來桜返事してなかつたじやん！！！ていうか何故に來桜を選ぶ！？

「あー、麗ーいたのか。」

いたよ。てかそのセリフはちゃんと出席を取つた奴が言え。

「…ムカついたので麗ーだけに自己紹介をさせまーす。オラせつさと前に出る。」

職権乱用だろそれ！？てかイジメだ！！

「来なければ退学。」

「あんたホントに教師か！？」

あ…思わず声に出してツッコんでしまった…

「てめえ… わざと前来いや。でないと、お前がイジメられるよう仕向けるぞ。」

…もうあんた先生じゃないだろ…

と思いながらも、俺は渋々前へと歩いていく。

「で、どうじりやいいんだ？」

「しろ、自介紹介。」

やつぱつしなきやならんのかい…

「五膳麗」。以上…

これ以上無いくらいの簡単な自己紹介をした。

「…因みに、現在美女一人、美少女一人と同居中。しかも美少女の許婚が一人いる。」

「萌ちゃん！…？」

何言つてんだあんたは！？つかバラすな！！！

ギロ……！

「…？」

ヤバい……野郎共の視線が鋭く……勿論美花以外の。

「もう席に戻つていじぞ、麗一。」

「あんたは鬼か、鬼畜か？」

「教師だ。」

「認めねえー！てか認めたくなーーー！」

「いいから早く席戻れ。」

…もう、いや…

かなり肩を落として、俺は一番後ろの自分の席へのつそりと戻つていいく。…途中の男子からの殺氣は冷や汗もんだった。うん。

「災難だつたな、麗一。」

「そりだな…」

席に着くのと同時に、前の席に座つてゐる琥春が上半身だけを捻り、慰めるように言つ。

「んじゃ、俺は職員会議に顔出してくつから、後は好きなよつじで行こう。」

と書いて、萌ちゃん。又は教師失格な萌ちゃんが教室から荒々しく出していく。そしてそれと同時に増幅される殺意、又は殺意。似た様な物か。が俺一人に集中される。

「…麗二。来るぞ。」

依然、俺の方に顔を向けていた琥春が研ぎ澄ましたかの様な声で言つ。

てが分かるよ。」口に向かってくる「こつらを見ればな。（野郎共）

「みんな。耳塞いどけ。」

來桜達だけに聞こえるよつ命令し、全員が耳を塞いだのを見計らつて俺はクラス全体に響く程の声で、言つた。

「…丽二。」

これを聞いた、耳を塞いだ俺達メンバー以外のクラスメート達は、突然糸が切れたマリオネットの様に倒れしていく。

「…やはり凄いな。君の使う技は。」

感嘆するかのように、倒れてゆくクラスメートを見ながら琥春が呟く。

「てか女子まで眠らしやしまつた……どうしよう。」

これじゃこのクラスは閉鎖学級みたいじゃん。

「ねえ、麗一君。皆が起きるのって大体どれくらい?」

ところで、周りを見ながら驚いている様子の清水が唐突に聞いてくる。

「何もしなけりや明日の夜まで起きないと思つぞ。」

：まあ、失敗したら一生起きないんだがな。俺に失敗なんてあるわけないから平然と使うわけだけど。

「授業」

「？ああ……そうだなあ……しょうがない。」

来桜が席を立つて、いつの間にか俺の横に来ていたのかは気にしないでおこう。

「皆でサボるか」

皆、一つ返事で肯定の意思を示した。

予想外。

「んじゃどうか行こう。」

ガラツ…

「な、なんだこれは！？」「

突然、かなり悪いタイミングで次の授業を受け持つ教師が入ってきた。そして教室の異常に声を上げた後に俺達を見つけた。

「何が起こった！？包み隠さず」

「…みんな、耳…」

「…」「…」「…」「…」「…」

皆に小さく呼び掛け、四人は黙つて耳を塞ぐ。…うん、良いチムワームだ。

「

教師が倒れた。

「んじや、気を取り直して行きますかー！」

楽しみの始まりだー！

不幸その一十九 彼女達は意外にもチームワークが良いです。（後書き）

涼「ククク、ではまたの機会にお会いしようか…ククク…」

不幸その三十 彼女はとんでもないお嬢様です。

「…楽しみ」

と來桜。

「僕達こんなふうに遊ぶの初めてだしね」

「私もだ。」

「私も」

んで、上から美花、琥春、メア。

「確かにこんな人数で遊びに行くなんて初めてだな。」

中学校時代は友達0人でいう悲惨な学校生活を送つてたからなあ…べ、別に寂しくなんてないんだからねつ！？勘違いしないでよねつ！？……と一人脳内で虫酸が走る事を考へている俺は現在、清水達と楽しくショッピングモールに来ている。

「…で、最初は何処に行くかが肝心なんだが…」

前方にある人込みを見る。

「てめつーこの糞餓鬼！！俺様に向かつて今何つった！？ああ！？」

「ダサメタボつて言つたのよ…この全身猥褻物…！」

「！？ぶつ殺すつ……！」

…例によつて例の如く、どう見ても人相の悪いメタボ中年が、黒いゴスロリ衣装に身を包んだ小学生くらいの美少女、美幼女？に絡んでいた。

「…こりや助けないといけない展開みたいだな、琥春。」

と琥春に向かつてそう言つたが、振り向いた先には既に琥春の姿は無かつた。

「ぐげはあつ！…？」

突然、さつきのダサメタボの悲鳴？が聞こえてくる。

「…何が……な！？」

俺はその悲鳴？が聞こえた瞬間、ダサメタボがいた場所を反射的に向く。そして衝撃的だ映像を目に映してしまつた。

「大の大人が…少女を襲うとは愚か者にも程がある…！」

拳を握り締めたままの琥春が、怒り心頭とばかりに怒氣をあらわにする。

「…うわ、琥春あんなに強かつたのかよ。」

「まだまだ黒川さんは本気じゃないみたいだけどね。」

俺の驚愕と呆れが入り交じった言葉に、清水が軽く新事実を載せながら返す。

「マジかよ…」

つかあの格好からして、たった一撃であんな重量ある奴を殴り飛ばしたんか…

「…琥春は怒らせない様にしような…」

「…うん。神に誓つよ…」

と男二人が一人で固く誓いを立てている時、琥春達はといふと。

「君は大丈夫か？（可愛い…）」

と琥春が内心のドキドキを隠してクールに言つ。

「大丈夫よ。それよりも貴女強いのね。尊敬するわ。」

さつきの恐怖を全く感じていないのか、少女もとい美幼女は凜とした声で琥春と会話をする。

「尊敬とは……そこまでの事をしたつもりは無いのだが？」

「したじやない。公衆の面前で絡まれてている少女を助ける事を。」

「あれは体が勝手に動いたまでだ。」

「それでもその勇気は、尊敬する対象として相応しい。」

「あ、ああ……」

少女の子供らしからぬ言葉に、琥春は少し怯む。

「危ない……」

メアが突然慌てた様に叫ぶが、琥春は咄嗟の事で反応出来ない。

「糞餓鬼供がああ……死ねえええ……！」

鼻から鮮血を垂れ流すこの世の「ミ事ダサメタボが、ギーから出したのか切れ味良さげなナイフを振り下ろしながら叫ぶ。

「…………。」

「かつ……？？」

ダサメタボが突然、静止したまま膝をつぐ。

「…………。」

「ぐぎやああ！？？」

今度はナイフを落とし、そのまま前のめりに倒れる。

「油断したら駄目だろ、琥春。」

「一麗一、「お前か？」

人込みを無理に掻き分け入つて来た俺に、琥春は驚愕の表情のまま聞く。

「俺しかいないうだろ? こんな事出来るのは…」

そう言つて、土下座に近い体勢をしているダサメタボを指す。

「そりだが…良いのか? こんな人込みの中で使つて。」

「当たり前だ。友達を助けるのになりふり構つてられつてか?」

…まあ、実際は周りの奴等立つたまま気絶してるんだけどね?

「…そりだな。」

「おう。」

「…だが、そう言いつつも周りの奴等を氣絶させている奴が言つて
説得力皆無だがな。」

「はは、バレてたか。」

てか何でバレたんだろうか。一応琥春達に気付かれないと
呟いた筈なんだが…

「ねえ。」

思考に没頭していた俺の目の前に、さつき琥春が助けた漆黒のゴ
スロリ少女…幼女? が来て、俺を呼ぶ。

「……ん？どうした？」

「あなたが使つたアレ、何？」

思考の海から帰つて来た俺に對して、ゴスロリ美幼女は何とも答えにくい質問をしてきた。

「俺、魔法使いだから。」

「冗談はいい。それよりもアレを説明して？」

俺のボケをこいつも躊躇つ事なくバッサリ一刀両断出来るとは……この幼女、只者ではないな。

「…………えと、秘密つて事で勘弁を？」

「そう。ならいいわ。」

あら、あつさりと…………大人だな。

「それよりも名前を教えてくれないかしら？……あなたも、そしてあそこにある人達も。」

とゴスロリ幼女が、かなり年不相応な感じに言つ。

……てか、アレ？どうして清水達もこいつのツレって分かつたんだろ？

「五膳 麗一。」

「黒川　琥春だ。」

「メアです　宜しくね？」

「僕は清水　美花です。」

「……姫川　來桜……」

と個人それぞれ個性豊かな自己紹介を繰り広げた俺達に対しても、ゴスロリ幼女は顎に手を添えて考える素振りをしている。

「…ふむ、覚えたわ。」

凄いな。てか俺より記憶力良くなえ？

「私は刹那。不良から助けてくれてありがとうね。」

と自分を指差してゴスロリ幼女：刹那は、丁寧にお辞儀をする。

「…といつても、私一人でこんな雑魚殺れるんだけどね。」

「そんな冗談は良いとして、どうして絡まれていたんだ？」

「…嘘ではないんだけどね。でもいいわ。答えたげる。」

そう言つて、刹那はダサメタボの所まで歩いていく。

「答えは簡単。私を連れ去らうとしてたのよ、『いつは』」

と刹那は一瞬下を向くが、すぐに顔を元の高さまで上げ、告げる。

「『黒霧』^{クロギリ} 社長の一人娘である、黒霧 刹那、事私をね？」

「…………」「」

「……」「」

「…あれ？」「レ、驚くとこ？」

琥春、清水、俺の三人は驚愕に顔を引きつらせ、來桜は少しだけ驚きを表す。

てかメアよ、そこは空氣読んでくれ…

不幸その三十 彼女はとんでもないお嬢様です。（後書き）

刹那「覚えときなさい！私は永遠の主人公よー！」

五年後の刹那「俺にその気は無いんだがな。」

麗一「あれ？ 一人称が…」

不幸その三十一 彼女は強いです。（前書き）

大変永らくお待たせして申し訳ありません。

b y レイン氷花

不幸その三十一 彼女は強いです。

「へえ……ここがゲーセンかあ

と、冷静な声とは裏腹に、おもつきし目を輝かせているゴスロリ少女こと、黒霧 刹那はソワソワとしながら俺に言う。

現在、黒霧刹那と俺ら御一行はゲーセンに来ている。何故ゲーセンなのかといふと。

「…行つた事ない

と來桜。

「私もだ。」

と琥春。

「僕も行つた事ないよ。」

と清水。

「私も」

メアは当然か…

「私はあまり外出させてもられないから行けなくて。」

で最後に刹那と来たからゲーセンに行く事にした。まあ、俺も行きたい所が特に無いから早く賛成したんだが。

「で、最初に何がしたい？」

とりあえず店内に入つて後ろに続く廊下に聞く。

「…まかせる」

「私も勝手が分からないからお前に任せる。」

「僕も。」

「おまかせ」

「私も任せるわ。」

…任せる、って…一番困る返答だぜいい？ちみ達。

「……じゃあはアレからだな。」

とりあえずソリで立ち往生もなんだかいと、仕方なく最初にやる奴考えて旨を誘導する。

「…」これは？

来桜がそのゲームの前で俺を見ながら聞く。…てかホントに知らないの！？

「それはゲームとかに良くある……お前達は知らないんだつたな。そのゲームは簡単に言つと、その付いてる銃で画面に映るゾンビ達を撃ち殺していくゲームだ。」

「なるほどな……」

「琥春やるか?..」

「やる。」

付いてる銃を持ちながら、画面を興味深そつに見つめる琥春に聞く。て即答か…

「他にやりたい奴~?」

「…嫌」

「僕もそつむの苦手だからバス…」

「私はいいや。」

「私は一度見てからやる。」

…もうかい。

「じゃあ俺と琥春で一回やつてみせるよ。」

とりあえずもう一方の銃を手に取る。

「て、重……異常に重いんですけビノレー？」

なんだコレ！？ てかなんでこんなに重いん…？ 絶対小学生無理だよなこのゲーム…！

「む？ それ程に重いのか」これは？

そう言いながら銃を軽く動かす琥春。 なんつづ腕してんだよ…

「もういいです…」

100円を一人分入れる。

「別に私の分は自分で出す。」

それを見た琥春が財布から100円を取り出して100円差し出して来る。

「いやない。 ここは黙つて100円得しどけ。」

「わつか… ありがと。」

「じゃ、早速やるだ…！」

オープニングっぽい物が画面に流れる。 …めっちゃリアルッスネ…

「銃にもケーブルらしき物が無いのか…」

なんつづか本格的だな…

「始まるみたいだぞ。」

「お、おひ。」

とりあえず重たい銃モドキを画面に向かって構える。

「出たな。」

画面に出てきたかなりリアルに作られたゾンビ達に標準を固定。
引き金を引く。

パン！

え。

何、今の銃声？本物？いやいや、ありえんだろ。

「また来たぞ。」

琥春がまたリアルゾンビが来た事を知らせる。

ああもうーヤケだ！！

パン！パン！

二体のリアルゾンビが頭を打たれて絶命した。てか流れる血まで
本物みてえにリアルうーつー！？

「次はドリームか……」

琥春が画面を見ながら呟く。

「ドリーム…しかも何かたくさんいるんですけどーーー。」

「繁殖期なんだろう?」

琥春よ、繁殖期で……他に言ひ方あるだらう?

「私もそろそろ参加するぞ。」

そう言つて、琥春も銃を構える。

「よし、じゃあ一人でさつとこいつを倒してクリアだ!」

重い銃を担ぐ様に持ち上げ、素早く狙いを定めて引き金を引いた。

「負けた……」

それはもう完敗。

圧倒的な敵の軍勢に成すすべなくゲームオーバーした俺は、隣の琥春を一瞥する。

……………

スゲー。

何なのこの上手さ。

これが素人って言えるレヴェルですかい？

ドン！…

「……殲滅完了。」

最後の、もう魔王っぽい威風堂々とした化物の眉間にこれでもか
つてぐらつて鉛弾を打ち込んだ琥春が静かに咳く。

ゲームの魔王はあんなにも堂々としていて凄いんだが、本物
はアレだからなあ……威厳も何もありやせんぜありや。……でも可
愛いから許す。

「麗ー。これはクリアしたとみなしていいんだな？」

画面に流れるHNDティングから田を離さずに、琥春が聞いてくる。

「ああ。それが終わりって意味だ。」

「そうか。」

「じゃあお前ら、次やりたい奴いるか？」

後ろを振り向き、美花、來桜、メア、刹那に聞く。

「僕はいいよ。」

「……やらない

「私も

「私は……やつぱり止めとく。」

……結局貴様等やらんのかい！！

「じゃあ、次行くぞーー！」

内心の怒りをとりあえず「ミニ箱に捨て、皆の先頭を歩く。

「次は……なんか正式な名前は分かんないカーチェイスの奴、やりたいものー？」

「やる。」

刹那が前に出る。

「他の奴は……」

「私はいい。」

「僕も。」

「いい

「私はー、 やつぱーこせ。」

「えじや決まりだな。」

「じゃあ行くぞー。」

「勝ちは渡せん。」

刹那が小柄な身体をシートに収めながら、威風堂々と立派である。

「それはじつのはセリフだあああー。」

後になつて思つ。

俺、なに小学生に本氣出したんの、と……

不幸その三十一 彼女は強いです。（後書き）

刹那「全ての物語は……」

五年後の刹那「俺に集まつ、「

刹那「私に終わる。」

麗一「俺を抜いて勝手にやらないでくれないか！？」

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n5241d/>

魔王はドM！？

2010年10月12日15時29分発行